aiolos

keiko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ａｉｏｌｏｓ

【Ｎコード】
Ｎ９０７０Ｖ

【作者名】
ｋｅｉｋｏ

【あらすじ】
＊＊＊鳥に誘われた世界で何を想う？　＊＊＊
離婚した母親と暮らす、ごく普通の少年エンノイアは、ある日、母親の恋人との葛藤から、家を飛び出す。街を走り抜け、川原にたどりついたエンノイアの耳に聞こえてきたのは、「アイオロス」と名乗る、謎の声。謎の声の主は、エンノイアの願いをかなえ、エンノイアの母親を恋人から取り戻してくれるという。そのためには、「アイオリア国」の「プネウマの鏡」を割らなければならない。エンノイアは謎の光に包まれ、ペットの鳥デュークと共に未知の国ア

イオリアへと旅立つ。エンノイアはそこで、さまざまな人たちに出会い、数奇な運命に巻き込まれていく……。

プロローグ　王

「陛下、いかがなされました」
ゆったりとしたローブを羽織った青年が、怪訝な顔で訊ねる。
白大理石の柱に囲まれただけの室内。立ち並ぶ柱の隙間という隙間から、春の日差しがほしいままに振る舞う。
床に整然と敷き詰められたタイルも、青年の衣服も、全て白一色。紅や碧の宝石の散りばめられた玉座だけが、唯一強烈な色彩を放っていた。
「この国に闇が迫っている」
返ってきたのは、曇りなく、それでいて底の読めない女の声。
青年の眉が、わずかに歪む。
玉座を見上げたその顔は女性のように繊細で、玉座の上の人物とよく似通っている。腰の位置まで伸ばされ、先端のあたりで緩く束ねられた髪は、空と同じ水色。
「闇、とは？」
謎めいた言葉の真意を求め、彼はさらに訊ねた。
青年の問いかけに対する答えはない。玉座の主は掌に水晶球を浮かべ、穿つような眼差しを向けている。薄絹のベールがふわりと揺れ、青年と同じ、空色の豊かな髪が覗き見えた。
その髪よりも深い青を湛えた双眸に、やがて人物の影らしきものが映り込んだ。
「闇を祓えるのは、新たなる王のみ。
――アイオロスよ。ここに映し出す者をこの国へ導きなさい。この国の新しき王となるべき人間を！」

第一話　はじまり

＞i２９７１６―３７８１＜

不思議な夢を見た。どこかの国の王様が、新しい王を探すのだ。

ピピピ……。

まだ夢と現実のはざまにいるぼくの耳元で、目覚まし時計がけたたましく音をたてた。

――うるさいな。黙れよ。

小さな声でつぶやいてみたが、ひとりでに音が止むはずはなく、なおも鳴り続ける。ぼくの言葉に怒ったのか、なんだかさっきより音量が増したような気がする。

ぼくはしきりに落ちようとしてくる上まぶたと闘いながら、目覚まし時計のレバーを下ろそうと手をのばした。

「……？」

下りない。というか、すでに下りている。

多くの目覚まし時計がそうであるように、ぼくの時計はセットするときはレバーを上げ、止めるときは下げる、という仕様になっている。

レバーはすでに下りている。だが目覚まし時計は鳴り続けている……。

「わぷっ！」

突然、顔に変なものが当たった。妙に温かくて、モサッとかワサッとかいう感触。

おそるおそる目を開くと、舞い散る黄色い羽根が目に入った。

「ピピッ！」

ここでようやく目が覚めた。目の前にいたのは、トサカのように

羽がピンと立った、黄色い鳥だった。
音をたてていたのは目覚まし時計ではなく、一羽の鳥だったのだ。
昨日目覚ましをかけ忘れたんだな、なんてことをぼんやりと考えながら、ぼくはわけがわからないまま呆然としていた。
ぼくの顔に突進してきたソイツは、ときどき黄色い羽根を散らしながら、部屋中を嬉しそうに飛び回っている。
種類は何だろう。インコのようにも見えるが、大きさはぼくの顔ほどもある。よく知らないけど、オウムかなんかの類いかもしれない。
だいたいなんでぼくの部屋に鳥が？
そんなことを考えていると、階下（した）から母さんの声が聞こえてきた。
「エンノイアー？　起きてるんだったら下りてきなさーい」
「あ、はーい！」
この鳥をどうすべきか悩んだが、不思議なことに鳥は自然とぼくの手にとまってくれた。
ぼくは鳥を肩にのせ部屋を出た。

一階へ下りると、母さんは朝食の支度をしていた。
てきぱきとテーブルに皿を並べる母さんはいつも通り、茶色の長い髪をくるくると一つにまとめて、パーカーにジーンズというラフなスタイル。全然化粧っけもないのに十は若く見える童顔で、友達からはよく可愛いお母さんだなんて言われる。
とはいえぼくまで母さんに似て童顔になっちゃったんだから、息子の立場としては複雑な気分だけどね……。
母さんは階段を下りてきたぼくに気づくと、振り返って言った。
「あら、そのコ、気に入った？」
ぼくはその言葉の意味をすぐに理解した。
「気に入った、って。もしかしてプレゼント！？」
どういう風の吹き回しだろう！　今まで何度ペットが飼いたいって言っても、いつも却下されてきたのに。

それに今日は誕生日でもクリスマスでもない。母さんはなんでもない日にプレゼントをくれるほど甘い人間じゃない。そんなに裕福な家でもないし。

ぼくが笑顔で答えを待っていると、母さんはぼくに負けず劣らず満面の笑みで答えた。

「そ。ロバートがあんたにって」

聞きたくもない名前が登場して、ぼくは心底がっかりした。だが、母さんはまだ嬉しそうに続ける。

「優しいよね〜。今度会ったらお礼言うのよ」

……確かに他の人が見たら、可愛い母親だと思うかもしれない。母さんは初恋に心踊らせる女の子みたいに頬をほんのり赤くして、うきうきと弾んだ調子で言った。

そんな様子の母さんとは裏腹に、ぼくの口から漏れたのは盛大なため息だった。

ぼくはエンノイア・グノーヴァー、十三歳。半年前に中学に入学したばかり。両親は離婚していて、今はこの小さなアパートに母さんと二人暮らし。

ロバートっていうのは、母さんの今の彼氏。もう付き合って二年ほどになる。なんでも新進気鋭の設計技師なんだそうで、母さんに言わせれば、「誠実で優しい」人。

母さんは今の通りロバートに熱をあげているようだけど……ぼくはロバートのことがあまり好きじゃない。

いや……けっこう、かも。

今日の朝食は軽くパンだけ。ぼくがバターを塗ったパンにかぶりついていると、母さんが向かいの椅子に腰かけながら、口を開いた。

「それでね、この前ロバートが」

「ごちそうさま！」

このまま席についているとまたまたロバートの話に戻りそうだったので、ぼくは急いでパンを口に押し込み、身支度をするためそそくさと洗面所に引き揚げた。
「ちょっと！　皿ぐらい片付けなさいよね！」
母さんがダイニングルームでなにやら文句を言っていたが、ぼくは気にせず父親譲りの金色の髪を整え始めた。
しばらくして、母さんが洗面所に入ってきた。
「ところでエンノイア」
「わかったよ。今片付けるから……」
「そのことじゃないのよ……あのね」
母さんはぼくの言葉を遮ったが、何度もあのね、あのね、と言いながら言い出しづらそうにもじもじしている。そして相変わらず頬を赤く染めたまま、ちょっと気恥ずかしそうな、意味深な表情で言った。
「今日は早く帰ってきてね。大事な話があるから……」
「はあ？」
一体なんだろう？　戸惑いながらもぼくはうなずくしかなかった。

「へぇ、いいなぁ！」
「だろ？　デュークって名前にしたんだ」
学校へ行く道中、クラスでいちばん仲のいい友達スティーブに会ったので、ぼくは歩きながら早速今朝の出来事を話して聞かせていた。スティーブは、ぼくの話を目を輝かせながら聞いていた。彼も動物が好きで、そんなところも気の合う理由の一つかもしれない。
そう、あの鳥、飼うことに決めたんだ。名前はデューク。響きがかっこよくて、自分ではいい名前だって思ってる。
「それにしても、ロバートからもらったっていうのが気に入らないよ。あいつ、母さんにいいとこ見せたいだけなんだ」
ぼくは今朝からずっと心の中で呟いていた不満を口にした。
「ロバートのどこがそんなに嫌いなんだ？　俺、この間お前んちに

行ったとき会ったけど、いい人そうだったじゃん」
「どこってわけじゃないけど……」
自分でもよくわからない。ただ、母さんとロバートが楽しそうに話しているのを見ると、なんだかイライラするんだ。

「ははーん。ヤキモチだな」
スティーブはニヤニヤ笑いを浮かべながら言った。
予想もしていなかった単語が出てきて、ぼくはスティーブのいたずらっぽい目を見つめたまま、ぽかんとなってしまった。
「ヤキモチ？　どういうこと？」
「お前はそのロバート、に母ちゃんを取られるのが怖いんだろ。母ちゃんを一人占めしておきたいんだ」
「ば……！　違うよ！」
思わず大きな声が出てしまった。なに言ってんだコイツ！
周りの人たちが「なんだ？」といった感じでこちらを振り向きだしたので、ぼくはあわてて声を低くした。
「ヤキモチなんかじゃないよ。そんな、子供じゃあるまいし。誰だって、これから自分の父親になるかもしれない人間には慎重になるものだろ……」
思わずそこで言葉を途切れさせた。
自分で言ってゾッとした。ロバートが父親になるかも、だって？
そんなバカな！
「わかった、わかった。そういうことにしておいてやるよ」
スティーブは、さも自分だけがオトナだとでも言わんばかりに、ハイハイ、と手を振った。
その様子が余計に腹立たしかったので、さらに反論しようとすると、学校の方角から朝のチャイムが聞こえてきた。
「やばい！　遅刻だ！」
話に夢中になっているうちに立ち止まってしまったみたいだ。いつの間にかけっこうな時間が経っていたらしい。ぼくたちは急いで

学校へと駆けていった。

ぼくは授業なんかそっちのけで今朝の出来事を反芻していた。

ヤキモチなんかじゃないけどさ……。なんていうか、ロバートには男らしさがないんだよ。いつもへらへら笑ってるんだ。母さんもあいつのどこがいいんだか……。

「あ～！　わからない！」

突然、それまで呪文のように聞こえていた先生の声が、ピタリとやんだ。不思議に思って顔を上げると、なぜかみんなが目をまん丸にしてこっちを見ていた。

あれ？　今ぼく、声に出して言った？

「エンノイアくん……そりゃわからないだろうね。遅刻してきたんじゃあ」

先生が、そのでかい腹を揺らしながら皮肉っぽく笑った。

「立ってなさい」

ぼくは教室の前のほうの、窓際の隅に後ろ向きで立たされてしまった。

まったく、今どき「立ってなさい」なんていう先生いるか？　あ、ここにいるか。

ぼくは心の中でブツクサ文句を言っていた。と、そのとき、誰かが小さな声でぼくの名前を呼んだ気がした。それもけっこう近くで。

まわりを見渡しても、先生はぼくの存在を忘れたかのように教科書を読んでいたし、他の生徒が呼んだ気配もない。

気のせいか……。そう思い、再び前に向き直ったとき。

「エンノイア」

今度は確かに呼ばれたような気がした。窓側から呼ばれたような気がして、そちらのほうを見ると……。

「デューク！？」

なんと、開け放した窓にデュークがとまっていた。デュークは名前を呼ばれた瞬間飛び立ち、教室の中に入ってきた。

「なんだ！？　鳥！？」
「大きいぞ！」
「こっち来るな！」
当然ながら、教室の中は大混乱。
デュークはひとしきり教室の中を旋回した後、前のほうに戻ってきて、ぼくの手にとまった。
「デューク！　どうしてここに？」
聞いてもしょうがないと思いつつ、聞かずにはいられない。するとデュークの代わりに、怒りに震えた先生の声が返ってきた。
「エンノイアくん……。それは君のペットかね？」
おそるおそる顔を上げると、最悪なことに、デュークは先生の頭の上に大変な落とし物をしていた。

「あーあ！　しぼられた、しぼられた！」
放課後、ぼくは二時間みっちりお説教を食らった。遅刻したうえ授業はうわの空、ペットまで連れてくるとはけしからん！　ということらしいんだけど。前二つはともかく、デュークはぼくが連れてきたわけじゃないぞ。
デュークは何食わぬ顔で飛びまわっているし。どこで見つけたのか、パン屑みたいなものを食べている。
ぼくは、母さんに早く帰れと言われたのを思い出した。
すっかり遅くなっちゃったな。ぼくが帰るまで待つなんて、一体なんの話だというのだろう。

家の玄関のドアを開けると、居間のほうからなにやら話し声が聞こえた。母さんの声と……ちょっとハスキーなこの声は、ロバートだ。
ぼくは居間をそっとのぞいた。見れば、母さんがロバートに紅茶を淹れているところだった。普段は髪をまとめて、化粧もしない母さんが、今は髪をたらして、妙にめかしこんでいる。ソファに腰か

けたロバートは、ワイン色のスーツを着ていた。ジャケットの下にはベストを着て、ネクタイまで締めている。ロバートはいつもフォーマルな服装をしているが、ここまであらたまった格好というのは珍しい。

二人はぼくにまったく気づくこともなく、楽しそうに話している。

なんだ。ぼくには早く帰れと言いながら、自分はロバートとおしゃべりか。

なんだか無性に腹が立ってきて、ぼくはそのまま居間を素通りして、二階の自分の部屋に上がろうとした。しかし、階段を昇る音を聞きつけて、母さんに呼び止められてしまった。

「エンノイアー？　帰ってるんだったら、こっちへ来なさーい！」

ぼくは仕方なく居間へ向かうことにした。

第二話　選ばれし少年

「やあ、エンノイアくん、久しぶりだね。おや？　その鳥は」
ロバートが、ぼくの肩にとまったデュークを見るなり、その茶色の目を細めた。
ぼくは、デュークを連れたまま居間に来たことを、ひどく後悔した。ありがとう、なんて絶対に言いたくなかったからだ。
「この前遅くまで残って仕事をしていたら、ぼくの職場に突然現れたんだよ。開いた窓にとまっていたんだ。なぜだか、きみにあげなければならないような気がしてね。だけど、気に入ってもらえたんだね！　よかったよかった！」
ロバートが、勝手にしゃべって、勝手に喜んだ。ぼくはソファに座る気にもなれなかったので、居間の入り口に立ったまま、なるだけ表情を変えずに言った。
「別に。こんなもの、もらったって迷惑だよ」
「エンノイア！」
母さんがヒステリックに怒鳴りつける。
「あはは。それもそうだね。悪かったね」
ロバートは頭を掻きつつ、眉を下げて笑った。
これだ。ロバートのこういうところが腹立つんだ。たまには怒ってみればいいのに。
「ごめんなさい、ロバート。普段はこんな子じゃないんだけど……」
「で？　なんなのさ。大事な話って」
いいかげんイライラしてきたので、ぼくは母さんの言葉を遮って聞いた。
「あ、それがね。私たち……結婚しようと思うの」
「え……？」

「結婚……って……、どうして……？」
最後の方はほとんど声にならなかった。
「どうしてって。あんただって私たちが付き合ってること知ってるでしょ」
「そういうこと言ってるんじゃないよ！」
ロバートと母さんが、面食らった表情でこっちを見ている。
「どうしてこんなやつと結婚するんだよ！　母さんはいつもそうだ！　ちょっと優しくされたらすぐその気になって。こいつだって、結婚したら父さんみたいに豹変するに決まってる。こいつが新しい父親だなんて、ぼくは認めないからね！」
無我夢中でそう言い終わったとき……。
頬に鈍い痛みが走る。
母さんがぼくの頬を叩いたのだ。
「レナ！」
ロバートが慌てて母さんを制止する。
「あんたはどうしてそうわからず屋なの……！　そりゃ、いきなり『この人が新しい父親です』なんて言っても、無理だと思う。だけど、あんたは一度でもこの男性（ひと）のことを理解しようとしたことがあるの！？　ロバートは一生懸命あんたと打ち解けようと頑張ってるのに……」
「よさないか、レナ！」
ロバートが、母さんをなだめながら椅子に座らせる。
「ともかく、座ってゆっくり話そう。ほら、エンノイアくんもこっちにおいで」

「……いだ」
「え？」
「母さんなんて大っっ嫌いだ！」
「あ！　エンノイア！」
ぼくは、たまらず玄関から飛び出し、街の中を駆け出した。
……どうしてあいつなんだよ。
母さんが仕事で疲れてるときも、父さんが長く家に帰らないときも、支えてきたのはぼくなのに。
街の人が驚いて、駆けているぼくの方を見る。
でも、気にもとめず走り続ける。
やっぱりヤキモチなのかもしれない。でも、怖いんだ。母さんがぼくよりロバートの方に行っちゃうのが。
お願いだから、ぼくを一人にしないでよ。
涙がこぼれてきた。それをごまかすように、ぼくはひたすら走り続けた。
……十分ほど走っただろうか。ふと気づくと、ぼくは川原に立っていた。
川原の周りに立った木々の葉が、寒そうに揺れている。まだ、春というには早すぎる3月。川からひんやりとした空気が流れてくる。日が暮れてきて、あたりは肌寒くなってきた。
……コートを着てくれば良かったな。
少し冷静になって、あらためて考える。

これからどうしよう……。
今すぐ家に帰るわけにはいかないし……。
いや、帰るもんか。ずっとここにいて、心配させてやろう。
そう思ったとき……。

「……エンノイア」
いつかも聞いた声が、ぼくの名前を呼んだ。
そうだ、この声、今朝教室で聞いたのと同じだ。

「誰！？　どこから話してるの！？」

ぼくは宙に向かって聞いた。
あたりには誰もいない。近くの木の枝に、デュークがとまっているだけだ。木々のざわめきが、一層激しくなる。
「我が名はアイオロス。……お前はあの男から母親を取り戻したいのだろう？」
「！」

「取り戻す」という言葉に、ぼくの心は動揺した。
それに、なぜ声の主はそんなことを知っているんだ？

「と、取り戻したいだなんて……。ぼくは別に……」
「隠さずともよい。私にはお前のことがわかっているのだ」

ぼくのことがわかっている？
一体誰だというのだろう。

すると、声の主がとんでもないことを言い出した。

「その願い、かなえてやろう」
「ほんとに！？」
「ただし、条件がある。アイオリア国の、国王が持つ、『プネウマの鏡』を割ってほしい。そうすれば、願いをかなえてやろう」
アイオリア？　まだ世界地図はよく覚えてないけど、そんな国は聞いたことがない。
「アイオリアって……そんな国どこに……」
そう言いかけたとき、目の前が明るく輝いた。あまりの眩しさに、まわりが見えなくなる。木々のざわめきも、川の流れる音も消えていく。
そのうちに、ぼくの意識は遠のいていった。

第三話　森の狩人

＞i２９７１７―３７８１＜

心地よい風が吹く。木々の葉がこすれる音がする。
先ほどのように冷たい風ではない。どこか優しく、暖かい風だ。
そっと目を開けてみる。徐々に視界が鮮明になり、そこが森であることが分かった。青々とした緑が日の光を受けて輝いている……。
「森！？」
とっさに飛び起きる。頭や体の上に落ちていた葉っぱが、衝撃で舞い上がった。
「川原にいたのに……どうして森に？」
ぼくの町の近くには確かに森があるが、今の季節はこんなに緑豊かではない。それに、どう考えても、自分の足で森まで歩いてきたとは思えない。

ふいに、背後で物音がした。
「な、何……！？」
身をこわばらせて、次の反応を待つ。
何者かの息遣いが聞こえる。おそらく、獣の。
おそるおそる後ろを振り返る。すると、一匹の獣がぼくの目に映った。
角は三本。顔の正面に一本、左右に一本ずつだ。体は獣らしく毛に覆われているが、その毛は淡い黄緑色をしていて、ぼくが今まで見たどの生き物とも一致しなかった。背丈はかなり大きい。四足歩行の状態で、ぼくの身長と同じくらいだろうか。
背に亀のような甲羅を背負っている。甲羅に刻まれた六甲模様の隙間から雑草が生えている。その姿がなんとも滑稽で、愛らしいと言えなくもない。

しかし今のぼくに愛らしいなんて言っている余裕はなかった。どんな危険な生物かわからないからな。ぼくとそいつとの距離は今、一メートルにも満たない。

とはいえ見るからに愚鈍そうな獣だ。刺激しないよう静かに後ずさる。そうしてそっと立ち上がった時……。

ぼくの動きの何が気に入らなかったのかそいつはザッザッ、と音を立てながら前足で勢いをつけると、いきなりぼくに向けて突進しだした！

「うわあああ！」

もはや気が気じゃない。ぼくは意味不明な言葉をわめきながら森の奥へと走った。だが獣はしっかりとぼくの後を追いかけてくる。

突然何かに蹴つまづいた。あわや転ぶというところで、もう一方の足でなんとか踏みとどまる。見ると地面にロープのようなものが這わせてあるが……？

すると今度は頭上から木の杭がふってきた！　それも何本も何本も。円を描いて落ちてくるので、ぼくはその円の中心に避難した。ふってきた木の杭は、先がとがっているので、うまい具合に地面に突き刺さっていく。

ようやく木の杭の落下がおさまった。幸い、この木の杭におびえて獣は追跡をやめたようだ。グルル、と喉を鳴らしながら、二、三メートル離れた場所からぼくの方を見ている。

一息ついて、あたりを見回す。間近の木の枝に果物の束のようなものがぶら下げてある。自然に生えたものではない。果物の束を網でできた袋に入れて、誰かが木の枝にぶら下げたようだ。

そうか、罠だったんだな。よく見れば、木の杭のあいだあいだに網がはられている。

あの獣が、ここにある果物を求めて走る。すると地面に張られたロープに足を引っ掛ける。頭上から網をはった木の杭がふってきて、

獣を取り囲む。と、まあ、そういうことだろう。それにしても誰がこんな仕掛けを作ったんだろう。

「伏せろ！」

ふいに、頭上から声が聞こえてきた。えっ！？　伏せろって！？

「ガアアアア！」

なんと、遠くにいると思っていたあの獣が、すぐ目の前まで迫っていた。牙の生えた口を大きく開いて今にもぼくに飛びかかろうとしている！　いや、ぼくに飛びかかろうとしているのではなく、後ろの果物を狙っているのか？　どちらにしても危険な状況であることに変わりはなかった。

「伏せろって言ってるだろ！」

そ、そうか。伏せるのか……。

ぼくがあわてて頭を下げると、ぼくの頭のてっぺんの毛をかすめて、何かがものすごい勢いで飛んできた。

それは獣に向けてまっすぐ飛んで行き、獣の額に命中した。矢だ！　誰かが木の上から矢を放ったらしい。

さらに二本の矢が放たれる。一本は獣の首に、一本は脇腹に命中した。

獣は悲鳴を上げながらしばらく暴れていたが、やがて横に倒れると動かなくなった。

おそるおそる木の上を見上げてみると、そこにいたのは、大きな弓をもった――少年だった。太い木の幹に腰かけて、不機嫌そうにこちらを見ている。年はぼくよりも少し上のようだ。十六、七歳といったところだろう。黒いベストの上に皮の上着を着て、ブーツを履いている。その手に持った弓だけでなく、腰のベルトには短剣、ブーツには小ぶりのナイフをさしている。しかし、ぼくを驚かせたのはその弓の腕前でも、その妙に古風な装備でもなかった。

肩までたらされた髪が、真っ白なのだ。シルバーブロンドとでも

いうのだろうか。ほとんど色のないその髪は、あたりの葉の色を反射して、淡く緑色に輝いている。さらに、角度によって銀色、紫色……と微妙に表情を変えている。

ぼくが少年の方をぼうっと見ていると、彼が口を開いた。

「あーあ、罠を台無しにしやがって。生け捕りにし損ねたじゃねえか」

その美しい容姿とは裏腹に、ぞんざいな口調。

ともあれ、彼が不機嫌そうにしている理由が分かった。この罠は、彼が仕掛けたものだったのだ。さっきの変な獣を捕まえるために。それが、ぼくのせいで失敗してしまったのだろう。

だけどぼくだって必死だったんだからな。

「あの……助けてくれてありがとう。それで、ここは一体……」

ぼくが話し終える前に、少年が木の上から下りてきた。そしてぼくの前に歩み寄ると、網ごしにぼくの顔をじいっと見つめ始めた。手をあごに当て、何かを考え込んでいる様子だ。

「な、何ですか？」

「……かわいいな」

ぼくは混乱した。

か、かわいいって……。確かにクラスの女の子に「エンノイアくんって、かわいい～！」とか、言われたことあるけどさ。そういうことは男には言われたくないっていうか……。

ぼくが一人でどぎまぎしているのにはかまわず、彼は続けた。

「羽がきれいだよなー」

ん？　羽？

ぼくに羽なんかあったか？

「ひゃっ！」

そのとき、背中に妙な衝撃があった。目の前に黄色い羽根が舞った。

そうだ、黄色い羽根といえば……！
「デューク！」
なんと、そこにいたのはデュークだった。いつの間にか近くにいたらしい。
毎度のことながら神出鬼没だな。こいつ……。
でもよかった。ここがどこだかわからないけど、一人じゃないってだけでずいぶんましだ。

「それで、ここは一体どこなの？」
ぼくは目の前の少年に問いかけた。ちなみに、ぼくはさっき、ハマっていた罠から出してもらっていた。
「何だ、お前よそ者か？　ここはパーンの森。アイオリア島の最南端だ」
「アイオリア！？」
ぼくは耳を疑った。
アイオリアって。そう確か、あの天の声が言っていた言葉。母さんをロバートから取り戻す代わりに、ぼくに課せられた条件。
「アイオリア国」の「プネウマの鏡」を壊せ、と……。ぼくはその聞いたことのない国、アイオリアに来てしまったというのか？
ぼくが一人考えていると、弓の少年はブーツにさしていたナイフを取り出し、さっき彼が倒した獣の皮を剥ぎ始めた。
「な、何をしてるの？」
突然の行動にぎょっとしたぼくは、聞いてみた。
「皮を剥いでるんだよ。皮は都で売れるからな。生け捕りなら家畜として高く売れるんだが」
「へえ……」
この国の人たちは、こんな動物を家畜にするのか……。
それはともかく、ぼくは再び考えた。あの天の声。アイオロスとか言ってたっけ。あいつが言っていたことだ。
「アイオリア国の国王が持つ『プネウマの鏡』を割ってほしい」

……。
国王って都にいるものじゃないのかな。
「よし、決めた！」
なんだ？　という感じで少年が振り返る。
「この人に、都まで連れて行ってもらおう！」
少年がドテッ、とわざとらしくよろけてみせる。意外にノリのいい人だな。
「なんだそりゃ！　勝手に決めんな！　だいたいなんで俺がお前を都に連れてってやらなきゃいけないんだ！」
彼がもっともなことを言った。でもぼくは引き下がらないぞ。
「お願い！　どうしても都に行かなきゃならないんだ。でもぼくは道もわからないし、さっきのやつみたいな化け物も倒せないし……」
「だめだな」
少年はあっさりと否定した。
「都に行くためならなんでもするよ、仕事も手伝うよ！？」
なおも食い下がるが、
「そういう問題じゃねーよ。俺は今すぐ都に行く気はねーし。だいいち……」
少年がぼくの襟首をつかんだ。
「俺は人間ってのが大嫌いなんだ。とっとと失せろ。俺がお前に優しくしてられるうちにな！」
軽く突き飛ばされた。
「じゃあな。モンスターと魔物に気をつけろ」
そう言って、少年は立ち去ってしまった。一人取り残されて、デュークと顔を見合わせる。（こいつ、人間みたいな動きをするんだ）
いけそうだったのに。口は悪いけど、なんだかんだでいい人だったし。それに人間が嫌いって……じゃあなんでぼくを助けてくれたんだろう？
まあ、考えても仕方ないか……。ぼくは、とりあえず歩き出すこ

とにした。

ここが最南端って言ってたな。北に歩けば森の外に出られるだろうか？　今は夕方みたいだから、太陽が沈みかけている方角が西。ということは、太陽に向かって右向きに進めばいいのか。

ぼくはとりあえずそう考えることにして、この見知らぬ大地を歩き始めた。

第四話　暗闇の中で

何時間歩いただろう。すっかり日が暮れて、太陽も見えなくなった。

しかし、一向に森から出られる気配がない。

方向が間違っていたんだろうか。それか、ものすごく広い森で、歩いて出るには何日もかかるのかもしれない。

もう、限界だ。喉はからからだし、お腹も空いた。

とうとうぼくは、一本の大きな木の根元に、座り込んでしまった。

「ピピッ」

デュークが、心配そうにぼくの顔を覗き込む。

「デューク……。お前、飛べるんだから、どうなってるのか見てきてよ」

通じるわけないと思いつつ、つぶやいただけだったが、意外にもデュークは「わかった！」と言わんばかりに一声鳴くと、空高く飛んで行った。

◇◆◇◆◇◆◇

しばらくして、デュークが戻ってきた。ひどくあわてている様子だ。

「ピピッ！　ピィ！　ピピピッ！」

「な、何？　なんて言ってるの？」

羽をばたつかせて、しきりに何かを訴えているが、ぼくにはさっぱりわからない。

ぼくが鳥の言葉でも話せればいいんだけど……。

「あ！　デューク！」

しびれをきらしたのか、デュークはどこかへ飛び去ってしまった。

◇◆◇◆◇◆◇

デュークがなかなか戻ってこない。

……もう、ぼくのことを見捨ててしまったんだろうか。

そりゃ、そうだよな。まだ、飼い始めてから一日しか経ってないんだし。さほど、なついてるってわけでもなかった……かもしれない。

だけど、デュークまでいなくなってしまうと、ぼくは本当に独りぼっちだ。

真っ暗な森の向こうから、不気味な獣の鳴き声や、うなり声のようなものが聞こえる。

……ふいに、暗闇に恐怖を感じて、身震いした。

あの少年が言ってたっけ。「モンスターと魔物に気をつけろ」って。

あの三本の角の怪物が「モンスター」なのかな。

じゃあ、「魔物」……って何だろう。

たくさんの恐ろしいイメージが、頭をよぎる。

（そんなもの、いるわけない！）

ぼくはあわてて頭からそれらのイメージを振り払うと、暗闇から、明るい月の方へと視線をうつした。

母さん、心配してるかな……。

煌々と輝く月を眺めながら、ふと、母さんのことを考える。

いつもなら今頃、学校であったことを話しながら、母さんの手料理を食べているのに。

……ちゃんと、話し合えばよかった。母さんと、ロバートと。

ぼく……、何やってるんだろう。

何だか、悲しくなってきた。すごく……みじめな気分だ。

ぼくが落ち込んでいると、背後から鳥の羽音が聞こえた。

デュークだ！　きっとデュークが戻ってきてくれたんだ！

ぼくのことを見捨てたわけじゃなかったんだ！

「デューク！」

嬉しくなって、振り返る。

しかし、ぼくの目に入ったのは、デュークではなかった。

背後の森に、無数の目、目、目。小さく鋭い二つの光のセットが、森の中の暗闇から、大量にのぞいていたのだ。

羽音がいっそう音量を増して、不吉に響いてくる。

「ひっ……！」

ぼくは恐ろしくなって、その場を立ち去ろうと、駆け出した。

と、その時……！

「うわあ！」

黒い塊が、ぼくに向かって大量に飛んできた。羽音の正体は、無数のコウモリだったのだ。

無数のコウモリたちが、ぼくにまとわりつき、噛みついてくる。

一つ一つの痛みは大したことないが、こう集団でこられると、たまったもんじゃない。

耐えきれず、地面に倒れ込む。体を左右に転がし、コウモリをはがそうと頑張るが、コウモリたちは、攻撃を緩めることもなく、まとわりつき続ける。

顔の周りにまでコウモリがはりつき、息ができなくなる。

絶え間ない攻撃と、息苦しさに、意識がもうろうとしてきた……。

ぼく、死んじゃうのかな。

こんな、わけのわからない場所で？　母さんと仲直りもできないまま？

そんなの、嫌だッ……！

必死に叫んだが、声にならなかった。

突然、茂みの中から三つの石ころが飛んできた。コウモリたちが一斉にぼくから離れていく。

どうやら、飛んできた石を追いかけて行ったようだ。

一体、どうなってるんだ？

不思議に思いながら、傷だらけになってしまった体を起こすと……。

「まったく。見てらんないな。プテラスごときに死にそうな顔しやがって」

そこにいたのは……信じられないことに、最初に会った少年だった。しかもその肩には、デュークがのっている！

「プテラスは動くものを追う性質があるからな。出会ったら、あんまり動かない方がいいぞ」

話の内容から、さっきのコウモリのことを「プテラス」と言っているのだとわかった。

いや、そんなことはどうでもいい。

「どうして、ここに？　それに、デュークも……」

少年は、こともなげに答える。

「さっき、こいつと会ったんだよ。聞けば、お前が道に迷ってるって言うからさ」

ぼくは唖然とした。どうして、この少年は、そんなことがわかるのだろう？

ぼくには、デュークが何を言っているのか、サッパリだったのに。

少年の肩にとまっていたデュークが、嬉しそうに、ぼくの肩に飛

び移った。心なしか、得意そうな表情をしている。

と、ここで、ぼくはあることに気がついた。

「じゃあ、ぼくが道に迷ってるって聞いて、わざわざ助けに来たの？　人間嫌いなのに？」

少年の方を見る。

自分でも、その発言と行動の矛盾に、気がつかなかったらしい。

彼の顔がみるみる赤くなってきた。

「べ、別に、助けに来たわけじゃねーよ。俺は、こっちに、用事があって……」

嘘だな。

顔を真っ赤にしながら、彼は何やら言い訳を続けている。

その様子が無性におかしくて、ぼくは吹き出してしまった。

「な、なんだよ！　何がおかしいんだよ！」

彼が怒りだしたのがまたおかしくて、一層激しく笑い続ける。ヒーヒー、涙を流しながら、笑い転げる。

緊張の糸が解けて、ぼくは笑いが止まらなかった。

夜の暗闇の中にぼくの笑い声が、ひときわ大きく響いた。

第五話　闇からの襲来　ｐａｒｔ　１

目の前に、スープと一切れのパンが置かれている。そのスープの皿を両手で持つと、じんわりと温かさが伝わってきた。
小さく刻まれたキノコが浮いただけの、実に質素なものだが、それでも今のぼくにはご馳走に違いなかった。
目の前には焚き火が燃えていて、火の爆ぜる音がなんとも心地いい。
ぼくは、夏休みのキャンプで焚いた、キャンプファイアーのことを思い出していた。

――――もっとも、あの時のキャンプファイアーはもっとずっとにぎやかだったけれど。
今は、肩の上でうつらうつらしているデュークを除けば、隣に少年がひとり座っているだけだ。
まだ幼さの残るその横顔は、彫刻のように美しく、軽やかで、非現実的にさえ感じられた。
少年の長いまつ毛が頬に深い影を落とし、両肩に落ちたシルバーブロンドの髪は、焚き火のゆらめきを映し出していた。

彼の名はシーア・ユークリッド。職業は、ハンターといったところかな。
各地の森を転々としては動物を狩り、その動物から得た骨や皮を街で売りながら暮らしているらしい。
まだ高校生くらいの年齢だというのに、なぜそんな暮らしをしているのか。気になったが、そこまでは聞くことができなかった。
（もしかしたらこの国では普通のことなのかもしれないけど……）

え？　なぜぼくが彼と一緒にいて、しかもご飯を食べているかっ

て？
話は、ぼくがコウモリに襲われているのを、シーアに助けてもらったところまでさかのぼるんだけど。
助けてもらった後、シーアが、照れ隠しに言い訳していたのがおかしかったのと、緊張が一気にゆるんだのもあって、ぼくは笑いが止まらなかった。
『何がおかしいんだよ！』とか、『笑うのをやめないと怒るぞ！』とか、何やらわめいていたシーアだったが、突然、笑っているぼくに、網でできたカゴをかぶせてきた。

「わっ！　いきなり何するんだよ！」
「薪集めてこい！」
はあ？　薪？
全くわけがわからない。すると、シーアが言った。
「仕事、手伝うって言ったろ？」
確かに言ったけど……。それは、都に連れていってもらう交換条件として言ったんだ。
あ、あれ？　てことは……。
見れば、シーアはなんとも照れ臭そうにしている。
「一緒に行っていいの！？」
「まあ、この際しょうがないだろ」
何がしょうがないのかよくわからないが、とにかく連れていってもらえることになったようだ！
「さっさと薪集めてこいよ！」
そんなわけで、ぼくは彼と都に行くことになったのだった。

そうそう、なんとこのスープ、彼が作ってくれたのだ。
シーアは荷物の袋からいそいそと鍋を取り出すと、ぼくが集めてきた薪を使って、焚き火を起こし、あっという間にスープを作ってしまった。

これが、すごくおいしいんだ。きっと、いつも森で生活してるから、こういうことに慣れてるんだろうな。
彼はさっきから、こっちの方を見向きもせずにスープを飲んでいるけど。

「ピピッ」
ぼくの肩の上で眠りかけていたデュークが目を覚まし、シーアの方へ飛んで行った。
「お、お前も食うか？」
シーアは、デュークに気づくと、手元のパンを細かくちぎり、デュークに食べさせ始めた。
満面の笑みを浮かべて、すごく楽しそうな様子だ。
彼が笑うのを、ぼくは初めて見た気がする。
そういえば、デュークのことを「かわいい」って言ってたな。
「動物が好きなんだね！」
ぼくが言うと、シーアはぼくがその場にいることを忘れていたかのように驚いた。
「ま、まあな」
ちょっと気まずそうにした後、
「動物は裏切らないからな……」
聞こえるか、聞こえないかくらいの声で、つぶやいた。
動物は裏切らない？
なんかよくわからないけど、意味深な言葉だな……。

「さて、明日も歩くし、そろそろ寝るか」
シーアは、先ほどの荷物から、薄い布を二枚取り出すと、それを地べたに布団のように敷いた。促されるまま、その中に潜り込む。
「あれ、シーアは寝ないの？」
てっきり、もう一組布を出すのかと思ったら、シーアは木にもたれて座ったままだ。

「ん？　ああ。俺は火の見張りだから」
そうか。ここにはあの変な怪物とかがいるもんな。火を絶やしちゃいけないんだ。
っていうか、それをシーア一人に任せていいんだろうか！？　ぼくも交代で見張った方がいいんじゃないか？
「当ったり前だ。四時間したら起こすからな。さっさと寝ろ」
なんだ、シーアは初めからそのつもりらしい。

しかし、ぼくはなかなか眠ることができなかった。寝ている地面が固すぎるせいもあるが、いろんな考えが絶え間なく頭をよぎって、落ち着かなかったからだ。

――――母さんは、どうしているだろう。結局、夜も帰らなかったことになる。きっと、心配しているだろうな……。
――――そうだ、今日は見たい番組があったんだっけ。母さん録画してくれているかな。
――――明日の学校はどうなるんだろう。無断で休んだら怒られないかな？

眠れないな……。
ふとシーアの方を見ると、彼は木にもたれかかったまま、顔を伏せていた。
ぼくが声をかけると、すぐに伏せていた顔を起こす。眠っていたわけではないらしい。
どうにも考えがまとまらないので、彼に話しかけてみることにした。
「シーア、プネウマの鏡……って知ってる？」
意外にも、すぐに返答がきた。
「ああ、聞いたことあるな。確か魔界と通じてるっていう……」
「ま、魔界！？　魔界なんてものが本当にあるの！？」

ぼくは、驚いた。思わず布団からはね起きる。
モンスターに、魔物に、魔界だって？　非現実的にもほどがある。
「さあな。でも、魔物は魔界から来るらしいぜ」
「その、モンスターとか、魔物とかって何なの？」
さっきから気になっていたことを聞いてみた。
「そんなことも知らねーのか？」
だってしょうがないじゃん。ぼくの国にはそんなものいないんだから。
シーアは、ため息混じりに、説明を始めた。
「いいか。モンスターっていうのは、長い間、月の光を浴び続けた動植物が変化（へんげ）したものだ。俺がさっき捕まえようとしていた、三本角のアイツなんかがそうだ。多少凶暴だが、奴らのテリトリーを侵さない限り、普通襲われることはない」
へえ……。でもアイツ、元は何の動物だったんだ？　あんな動物見たことないぞ。
「アイツは、雑草か何かだろ。最もありふれたモンスターだとも言えるな。トリプスって呼ばれてる」
そういえば、甲羅のような背中に雑草が生えてたっけ。しかし、随分とアクティブな雑草だ。
「対して、魔物ってえのは、魔界から来る、と言われている生き物で、知能が高く、町や村を襲うこともある。大抵は夜にしか出ないな」

なんだか、ものすごい話になってきたな……。
森の中を闊歩するモンスター。魔界と呼ばれる場所から来るという魔物たち。そして、その魔界と繋がっているという、プネウマの鏡……。この国は、ぼくの住んでいる世界とは随分と異なるようだ。
眠れるわけないと思っていたが、さすがに精神的な疲れもあってか、シーアが話を終える頃には眠りに落ちていた。
もっとも、二時間後にはきっちり叩き起こされたけど。

見張りを交代し、後は明るくなっていく空を眺めながら、朝までぼんやりと過ごした。

◇◆◇◆◇◆◇

「私たち二人きりで暮らすことにしたの。エンノイア、あんたが邪魔なのよ」

母さんが、ロバートとどこかへ行ってしまう。

――嫌だ！　ぼくを置いていかないで！

「母さん！」

叫びながら、母さんの背中を必死でつかむ。

「母さん！　行かないで！」

やった！　つかまえた……！

◇◆◇◆◇◆◇

「誰が母さんだ」

つかまえたのは、母さんではなかった。

寝ぼけ眼をこすりながら、よく見ると、それはあきれ顔をしたシーアだった。ぼくは間違って、シーアの上着をつかんでいたらしい。

なーんだ。夢か。てっきり母さんが、ぼくをおいてロバートとどこかへ行っちゃうのかと思った。

シーアはとっくに起きていて、食事の支度をしていた。あれ？そういえばぼくが見張りをしていたと思うんだけど……。

ぼくはいつの間にか木にもたれかかったまま眠っていたようだ。そしてこれまたいつの間にかぼくの上には布団代わりの布が掛けられていた。

「それで、あとどのくらいかかりそうなの？」

昨日の残りのスープを食べた後、ぼくたちは早々に出発した。

「そうだな。あと三日ってとこかな……」
「三日ぁ！？　もうちょっと早く行けないの？」
三日も留守にするなんて。喧嘩して飛び出してきたとはいえ、いくらなんでも母さんが心配するよ。下手すると捜索願いなんか出されちゃうかもしれない！
「無茶いうなよ。馬でも一日かかる距離なんだから」
馬を基準に言われてもよくわからないけど……。

だしぬけに、森の中から葉をこする音がした。ぼくとシーアに、明らかな緊張が走る。
ガサッガサッガサッガサッ。
ついてきてるな……。姿は見えないが、木から木へ、飛び移っている気配がする。
トリプスではなさそうだ。もっと身軽なやつだ。
一瞬昨晩のコウモリたちが頭に浮かぶが、少なくともあのような大群ではないだろう。
「シーア……」
「しっ。黙ってろ」
見れば、シーアはとっくに弓を構えている。
そうしてソイツがぼくらの横を通りすぎた気配がした時、シーアが矢を放った。放たれた矢はまっすぐ飛んでいき、木々の中に吸い込まれていったかと思うと、何か黒い物体を伴って落ちてきた。
シーアと共に、その物体に駆け寄る。
よく見ると、それは小さなドラゴンだった。
いや、実際のところ、ドラゴンなんて見たことがないけど。それは、物語なんかでよく見るドラゴンにそっくりだった。
ただし、すごく小さい。それから、足と翼は持っているが、手はないようだった。
「コイツは魔物だな……」
そのドラゴン？　を見て、シーアが呟く。

そうか、魔物……。
魔物とは、魔界から来る、と言われている生き物で、知能が高く、町や村を襲うこともあるという。
それにしてもおかしい。確かシーアは魔物は夜にしか出ないと言っていたはずだけど……。
「そうなんだ。近頃明るいうちから魔物が出ることがある。これは何か、この国でおかしなことが起こっているのかもしれないな……」

ぼくらはそれから、日が暮れるまで歩き続けた。
辺りが夕闇に包まれた頃、ぼくらの目の前に一つの村が現れた。
「村だ！」
ぼくは歓喜した。疲れ果てて、もう一歩も動けそうになかったからだ。
今日は晴れていたというのに、ぼくもシーアも雨に降られたように汗でびっしょりだ。
相変わらず元気なのは、鳥のデュークくらい。ちぇ、飛べるやつはいいよな。
ともかくこれでゆっくり休める……。

「さあて、ここら辺でひと休みするか！」
そう言いながらシーアが荷物を置いた『ここら辺』とは、まだ村に入りきらない森の地面の上だった。
そして、昨日と同じように、焚き火を組み立て始めてしまった。
「む、村に入らないの！？」
ぼくが慌てて聞くと、シーアはさも当たり前のように答えた。
「言ったろ。俺は人間が嫌いだって」
「で、でも……！」
足が棒になったように疲れていても、滝のように汗をかいていても、村の宿で休むことを拒否するほど人間嫌いだなんて。
「それに、宿に泊まる金なんかねーし」

た、確かに……。
ぼくは家に財布を置いたままだし、向こうのお金がこの国で通用するとも思えない。民家に泊めてもらえるよう交渉することもできたかもしれないが、もうぼくにそんなことをする体力は残っていなかった。
「じゃあ、ぼくも野宿する……」
ぼくは、心底がっかりしながら、了解した。
シーアはそんなぼくの様子なんか気にも留めず、早速晩御飯の支度をしていた。

第六話　闇からの襲来　ｐａｒｔ　２

「……イア」

誰かが遠くで呼んでいる気がする。

「……ノイア」

まただ。

うっすら目を開ける。まだ夜中のようだ。

眠いんだよ。邪魔しないでよ。

ほんの少し身動きして、再び深い眠りに落ちようとしたとき……。

◇◆◇◆◇◆◇

「エンノイア！」

ぼくは飛び起きた。

瞬時にあたりを見回して、自分の置かれた状況を理解する。

そうだ！　今はぼくが火の見張りをしていたんだった！　寝ている場合じゃない！

よかった……。火は消えてない。

煌々と灯った焚き火の炎を見ながら、ほっと肩をなでおろす。

やれやれ、今日は一日中歩いたからな。

昨日はシーアが先に見張りをしたので、今日はぼくが先に見張りをすることになったのだが、なにしろ疲れた。昨日もほとんど寝ていないし。

数分と経たないうちにぼくは眠りこけてしまっていたのだ。
ぼくは、昨日襲われた、コウモリのような姿をしたモンスター――『プテラス』というらしい――のことを思い出して、身震いした。
もう二度とあんなのには関わりたくない。しっかり見張らなきゃな。

両頬を軽くたたいて、自分自身を戒めた後、ふと、焚き火の反対側で眠るシーアを見た。
焚き火に照らされる、シルバーブロンドの髪。肩まで届く長い髪を、束ねることもなく、無造作に投げ出している。
こちらからは顔は見えないが、スースーと寝息が聞こえる。

……彼について、気付いたことがある。

昨日の夜も同じように火の見張りをした。
二時間ずつ交代で、片方は見張りをし、その間片方は眠る。
……しかし彼は、ぼくと見張りを交代した後も、ときどき起きてはぼくの様子をうかがっていたのだ。
最初は、眠れないのかな、とか、ぼくが居眠りをしないか心配なのかな、とか、思った。
でも、次第に、ぼくを警戒してるっていうのかな……、ぼくがあやしい動きをしないか、目を光らせていることがわかった。まるで、人間におびえる獣のように。
寝る時も決して短剣を手放さない。
普段は、ちょっぴり素直じゃないけど、優しくて、意外とノリが良くて、普通の少年に見える。
けれど、森の中に隠れ住み、他人の前で眠ることを警戒し、村に入ることを拒む。
そういったことが、シーアがこれまでたどってきた人生を物語っ

ているような気がした。

しかし、さすがに疲れたんだろう。今日はぐっすり眠っているように見える。

起きていた気配も、起きだす気配もなさそうだった。

ん？　ちょっと待て。

じゃあ誰がぼくの名前を呼んで、ぼくを起こしたんだ？

「ピピッ！」

ぼくが考えていると、どこにいたのか、デュークがひどくあわてた様子で飛んできた。

デュークがあわてているのを見るのは、これで二度目だ。

一度目は、ぼくが森で道に迷っていた時。

なんとデュークは、一度は離れたシーアを、呼びに行ってくれたのだ。

どういうわけか、シーアにはデュークの言いたいことがわかるようで、ぼくが道に迷ったことを悟り、助けに来てくれた。

ぼくには、デュークの言っていることはわからない。

でも、今回はそんな心配をする必要はなかった。

なぜなら、すぐにデュークがあわてている理由がわかったからだ。

ものすごい突風が顔に吹きつける。

とても目を開けていられない。

あんなに頑張って見張っていた火も、あえなく消えてしまった。

間もなく、突風を起こした原因のものが現れた。

ドラゴンだ！　とてつもなく大きなドラゴンだ！

緑色の大きな翼で、森の上空を優雅に飛んでいく。

足に、鋭い爪があるのがわかる。

よく見れば、そのドラゴンには手がなく、朝に見た小さなドラゴ

ンに似ていた。
もちろん、大きさは全然違う。
「シーア！　起きて！」
あわててシーアをたたき起こす。
しかし起こすまでもなくシーアはとっくに起きていた。
あまりの風に立ち上がれないでいるようだ。
「魔物だ！　ワイバーンだ！」
シーアが叫ぶ。
そのワイバーンと呼ばれたドラゴンは巨大な翼をはためかせながら、ぼくたちの頭上を飛び去って行った。
飛び去った後もしばらく風は収まらず、あたりの木々の葉を巻きあげていった。

「逃げるぞ！」
呆然と突っ立っていたぼくの腕をつかみ、シーアが急かす。
ぼくたちは取るもの取りあえず、息も絶え絶えに、森の中を走った。
村から百メートルほど離れたところで、振り返り、様子を見ることにした。
そう、ドラゴンが飛び去ったのは、村の方向なのだ！
そして、ぼくは信じられない光景を目の当たりにした。
村の上空を飛んでいたドラゴンが、大きく息を吸うと、口から巨大な炎を吐いたのだ。
先ほどまで暗闇だった森の中は、明るく照らしだされ、ここまで熱気が伝わってきた。
熱気にあおられて、森のざわめきが激しくなる。
一瞬にして、村は炎に包まれた。
人の気配すらほとんどしなかった静かな村が、一転して悲鳴と轟音に包まれた。
燃え上がる家々から、次々と村人たちが飛び出してくる。

赤ん坊を抱えた女の人、親とはぐれたらしい子供たち、炎に囲まれて行き場のなくなった老人……。
懸命に家を消火しようとする人もいたが、とても意味のあることとは思えなかった。
村が、文字通り地獄のように変わってしまったのだ。

すると突然、村の上空を飛んでいたドラゴンが下降し始めた。
「あ！　シーア！　女の子が！」
村の中央広場に降り立ったドラゴンは、炎から逃れようと広場を逃げ回っていた女の子の肩をその鋭い爪でつかむと、女の子をつかんだまま再び上昇し始めてしまった！
「さらうつもりなんだ。大変！　助けなきゃ！」
ぼくはシーアの方を振り返り、そう言ったが、
「いや……助けても無駄だ、行こう」
なんとシーアはそう言うと、村とは反対方向に歩き出そうとしていた。

「無駄……だって？」
ぼくは耳を疑った。
見捨てろっていうのか！？
目の前で村が襲われているのに！？　女の子がさらわれようとしているのに！？

……シーアはいいやつだと思ってた。
素直じゃなくても。人間嫌いでも。
なんだかんだでぼくを助けてくれた。
それなのに……。

「そんなの納得できない！」
ぼくは思わず叫んでいた。

シーアが驚いてぼくの方を見る。
「弓を貸して！　ぼくが助ける！」
ぼくはシーアが背負っている大きな弓を、すかさず奪い取ると、ドラゴンに向かって構えた。
弓の弦（つる）が思った以上にかたい。歯を食いしばりながら引くのがやっとだ。
「お、お前、弓が使えるのか！？」
シーアが背後で叫ぶ。
「やったことないけど……」
弓を一層強く引く。弦（つる）が指に食い込んで痛い。
「やるしか……ないだろ……！」
叫ぶと同時に、ぼくは矢を放った。

第七話　闇からの襲来　ｐａｒｔ　３

矢は、放物線を描きながら、勢いよく飛んで行った――ドラゴンとは全然違う方向に。
当然ながら、ドラゴンは全くひるむことなく、女の子をつかんだままだ。
「あれ？」
「お前……下手だな」
シーアがあきれた声で言った。
「貸せ。弓っていうのはこうやって射るんだ」
シーアは、ぼくから弓をむしり取ると、その繊細な外見からは想像できないほど、軽々と弓を引いた。
そして、矢は正確にドラゴンの足を貫いた。
ドラゴンは耳をつんざくような悲鳴を上げ、しばらく暴れていたが、やがて女の子を解放した。
「あ！　落ちるよ！」
少し高いところまで浮上していたので、放された少女は森の中に落下してしまったのだ。
「下は森だから大丈夫だろ。それより……来るぞ！」
シーアが言うよりも早く、怒りに狂ったドラゴンが、こちらに向かって突進してきた！
ものすごい風圧で、何が何だか分からなくなる。
ドラゴンの鋭い爪が、目の前に迫ってきた。

身がすくんで、動くことができない。目を固く閉じ、身をかがめ、ドラゴンが過ぎ去るのを待つ。
一瞬、何かが覆いかぶさってくるような感触がした。
ようやく、風がおさまり、おそるおそる目を開ける。

……？
特に、何事もなかったようだ。ドラゴンにさらわれたわけでも、怪我をしたわけでもない。
だが、シーアはそうではなかった。
苦しそうに息をつきながら、しゃがんでいる。
「くっ……」
「シーア！」
なんと、シーアはあのドラゴンの鋭い爪で、肩を引っ掻かれていたのだ！
大怪我というほどではないが、服が裂け、血が出ている。
破れた服の隙間から、肌に痛々しい数本の筋が見える。
肩に触れようとすると、うるさそうに払いのけられた。
「いいからお前はあの女を助けに行け！」
「シーアはどうするの！？」
まさか、こんなところに置いては行けない。

「俺は、あいつを倒す……！」

草木をかきわけながら、必死で少女を探す。
村からは少し離れたところに落ちたようだ。
ドラゴンは、再び村の広場のあたりを旋回していた。
下の方から、数本の矢が飛んでくる。
その何本かはドラゴンに刺さり、何本かはうまくかわされた。
（シーアが戦ってるんだな）
村の様子を確認してから、再び少女を探し始めた。
と、その時、草と草との間に、赤いスカートとそこから出た茶色のブーツの足が見えた。
あの女の子が履いていたものだ！
急いで草をかき分ける。
すると、落ち葉にまぎれて、人が倒れていた。

思った通り、さっきドラゴンにつかまっていた女の子だ。
歳は、ぼくと同じくらいだろうか？　金色の長い髪に、カチューシャをしている。
気を失ってはいるが、幸い、目立った怪我はないようだ。
どうやって運ぼうか考えあぐねていたら、彼女が目を覚ました。
「あ……あなたが助けてくださったんですか？」
ありゃりゃ。まいったな。
そうとも言えるし、そうでないとも……。
とりあえず、ぼくはちゃっかり手柄を自分のものにしておいた。

彼女に肩を貸し、歩きながら、ぼくはあることについて考えていた。
さっき、ドラゴンに襲われた時。
一瞬何かが覆いかぶさってきたような気がした。
あれは、シーアがぼくをかばってくれたのだ……。
だから、ぼくは怪我をせずにすみ、彼は肩を引っ掻かれてしまった。
人間嫌いと言いながら、ぼくをかばってくれる。少女を見捨てろと言いながら、今こうして村のために戦っている。

ぼくにはシーアがよくわからないよ……。

木の下に身を隠しながら、少女と共に村の入口まで行くと、シーアは相変わらずドラゴンに矢を放っていた。
しかし、残念なことに、ドラゴンの巨大な胴体には、シーアのちっぽけな矢などかすり傷でしかないようだ。
何本矢が刺さろうが、全く動じていない。
ドラゴンが再び大きく息を吸い始めた。
炎を吐く気だ！

「あーんママー！」
間の悪いことに、親とはぐれてしまった小さな子供が、広場に出てきてしまった。
ドラゴンがそちらを振り向く。
「危ね……！」
シーアがとっさに子供をかばった。
ちょうどその時、ドラゴンが炎を吐いた！
「うわあああ！」
「シーア！」
背中に炎をくらってしまった。
がっくりとうなだれるシーア。
「村に他に戦える人はいないの！？」
さっき助けた女の子に尋ねる。
「若い男は皆出稼ぎに行っているんです……村に残っているのは女子供と老人ばかりで」
本当に申し訳なさそうに、少女が答えた。
そんな……。じゃあどうしたら……。

突然、ぼくの脇からデュークが飛び出した。
そのまま真っ直ぐドラゴンへと向かって行く。
そして、ドラゴンの顔を嘴でつつき始めた。
「デューク！　何をする気だ！」
案の定デュークはあっさりとドラゴンの翼に払いのけられてしまった。
しかし、それでもめげずにまとわりつき続ける。
とうとうしびれを切らしたドラゴンが、デュークに向かって軽く火を吐いた。
軽くといっても、デュークにとっては全身が包まれるほどの炎だ。
真っ黒になったデュークが、広場に墜落してきた。
ぼくはあわててデュークを助けに行った。

見るも無残な黒い塊が、煙を出しながら、広場に落ちている。
嫌だ嫌だ！　デュークが死んじゃうなんて！
泣きそうになるのをこらえながら、そっとデュークを拾いあげると、少々羽が焦げてはいるが、デュークはピンピンしていた。
ぼくの顔を見るなり嬉しそうに羽ばたいた。
それを見て、なおさら涙が出そうになる。
「デューク！　どうしてあんな危ないことをしたんだよ！」
デュークを叱ろうとして、ぼくはドキリとした。

デュークの目は、真っ直ぐぼくを見ていた。
まるで、何かを訴えかけるように。
まるで、ぼくを試すように。
ぼくには、デュークの言葉はわからないけど。
その目線の意味は、わかる気がした。
「デューク、お前……、まさかぼくに戦えって……？」
返事をするように、デュークは一際大きな声で鳴いた。

そうだ、戦わなくちゃ！　助けなきゃ！
村の人たちを。そして、シーアを。

だけど、どうしたらいい？
ぼくには、力も、武器もない。
何か良い方法はないだろうか？
あたりを見回すと、家屋から焼け落ちた丸太が一本、落ちていた。
そうか、これなら……。
アイツは意外にも、炎を吐く時、特定の場所を狙って吐いている。
魔物は知能が高いのだと、シーアは言っていた。
ぼくは閃いた。
本当に、一か八かの方法だけど。
或いは、うまくいくかもしれない。

ぼくはシーアが弓を下ろしていることに気づいた。もう矢が残っていなかったのだ。
ドラゴンが、勝ち誇ったように、シーアに向けて炎を吐く準備をしている。
不意のことに、シーアは避けることができず、立ち尽くしていた。

ぼくは大急ぎでシーアを突飛ばし、かばった。
もろにくらうことは避けられたが、熱気が背中に当たる。
背中が焼けそうなほど熱くなった。
「エ、エンノイア！？」
シーアが目を見開いて驚いている。
ぼくは、シーアをかばうようにして立つと、ドラゴンに向かって声高に叫んだ。
「やいワイバーン！　村を焼くなんてずるいぞ！　ぼくと正々堂々勝負しろ！　負けたら大人しく帰るんだぞ！」
シーア含めて、周りの人たちは皆『何を言ってるんだコイツは……』と言わんばかりにぽかんとなってしまった。
ドラゴンにこんなこと言ってもしょうがないと思う。
でもセリフはどうでもいいんだ。
ヤツの気が引ければ。
ぼくは方向転換して、ドラゴンを挑発するように走った。
狙い通り、ヤツはぼくの後をついてくる。
身を低くし、炎を吐く準備をしている。

徐々に高度を下げ、手の届くほどの高さになった。
そしてついに、大きく息を吸い込んだ……。
今だ！
ぼくは、さっき見つけた丸太を拾い上げると、それを勢いよくドラゴンの口にねじ込んだ。

やった！
突然のことにドラゴンは目を白黒させながら動揺している。
必死に足をバタつかせるが、丸太はドラゴンの口にピッタリとはまっているので、なかなか取れない。
さあ、これでとどめをさせば……！

ここで、ぼくは、自分の作戦の致命的なミスに気づいた。
ぼくにはドラゴンにとどめをさす手段がないのだ。
その時、ふいに肩を叩かれ、声が聞こえた。
「よし！　後は任せろ！」
シーアだ！
シーアは腰のベルトから短剣を取り出すと、未だ暴れているドラゴンの腹に突き立てた。

ドラゴンの悲鳴が、村中に響き渡る。
シーアが勢いよく剣を引き抜くと、ドラゴンの腹からどす黒い血があふれ出てきた。
さらにもう一撃加えようと、剣を構える。
と、その時。ふいにドラゴンが翼をはためかせた。
「うわ！」
翼に弾き飛ばされるシーア。
ドラゴンはそのまま浮上すると、一気に飛び去ってしまった。
しばらく警戒して注意深く見つめていたが、どうやら村に戻ってくる様子はなさそうだ。
「ちっ、長い剣ならとどめがさせたのに……」
シーアがひとりごちた。

「シーア！」
ぼくはシーアに駆け寄った。さっきの肩の怪我と、服の背中が少し焼けていること以外は、特に大きな怪我はないようだ。

「この、ばか！」
あれれ、てっきり褒められると思っていたのに。いきなりポカッ、と頭をこづかれてしまった！
「なんて無茶なことをするんだ！　失敗したらどうするつもりだったんだ！？」
再び手を振り上げた。またたたかれると思い、とっさに目をつぶると……。
「……だけど。お前見かけによらず勇気あるんだな。感心したぜ」
シーアはそう言って、ぼくの頭にふわりと手を置いた。
そっと目を開けると、シーアは笑っていた。

その様子を見て、胸に何か、熱いものが込み上げてきた。
この国に来てよかった。シーアに会えてよかった……。
大げさだけど、ぼくは、そんな気持ちになっていた。
ぼくは笑って、シーアとハイタッチした。

森の方から、何人かの人の声が聞こえてきた。
避難していた村人たちのようだ。
あの少女が言っていた通り、村人のなかには、老人と女子供しか見当たらなかった。
その中の、リーダー格と思しき老人が前に進み出た。

実のところを言うと、ぼくはちょっと不謹慎な期待を抱いていた。
はっきり言って、ぼくたちはヒーローだ。この村を救ったんだから。
だからきっと、この後、村長に感謝の言葉なんかを言われて、村中の女の子にちやほやされて、村に伝わる宝なんかを貰ったりして。
そんな勝手な想像をしていた。
しかし、男の口から告げられたのは予想外の言葉だった。
「お前たちは余計なことをしてくれたな」

「え……？」
「見ろ。村はすっかり焼かれてしまった。これで明日からどうやって暮らせというんだ」
そ、それはそうだけど……。
村が焼かれたのはぼくたちの責任じゃない。
すると、その男はぼくの隣にいたさっきの少女を見た。
「その娘を差し出せば魔物も大人しく帰ってくれたかもしれんのに……」
「そんなぁ……！」
助けを請うように、シーアの方を見る。
しかし、シーアは、皮肉っぽい笑いを浮かべ、
「だから言っただろ？　助けても無駄だって」
そう言って、村の外へと歩き出してしまった。
ぼくも、村人たちに追われるように、村を出た。
あの少女が、物言いたげに、村を去るぼくたちを見つめていた。

第八話　草原の都

村人たちに追われるように村を出たぼくたちは、再び都に向けて歩き出した。
「そりゃ、感謝されたくて助けたわけじゃないけどさ。なにもあんな言い方しなくても……」
ぼくは、黙々と前を歩くシーアに、愚痴をこぼし続けていた。
「それに、納得いかないよ！　村のために、あのコを犠牲にしようだなんて！」
すると、ずっと押し黙ったまま歩いていたシーアが、初めて口を開いた。
「人間なんてそんなもんさ。自分の利益のためなら、平気で他人を踏みにじるんだ……」

この言葉には、胸を締め付けられる思いがした。
それはおそらく、彼の経験から出た言葉なのだろう。
少女を助けることを、無駄だと言ったシーア。　きっと、今までにも、幾度となく人に傷つけられ、失望させられてきたのだろう。
それこそが、彼の、人間嫌いの所以（ゆえん）なのかもしれなかった。

「あの……！」
ふいに、後ろから呼び止められた。
振り返ると、先ほどドラゴンにさらわれそうになった、あの女の子が立っていた。
二人でぼくらを追ってきたのだろう、隣には母親と思しき女の人も立っている。
女の子は、かすり傷をおった右腕に包帯を巻いていた。
「やあ君はさっきの。もう怪我はいいの？」
「は、はい。お陰様で。あの、それより……」

女の子はなんとも辛そうな表情で話を続けた。
「さっきの村長の言ったこと……。どうかお気になさらないで下さい。近頃は魔物の襲撃が多く、村の者も気が立っているんです」
ぼくは驚いた。
この子は、ぼくたちを励ますためにわざわざ追いかけてきてくれたのか？
「それに私は助けていただいてすごく感謝してます！　だからどうか……気を落とさないで下さい……」
最後の方は、まるで懇願するようだった。

どうして、この子を犠牲にすることなどできるだろう。
こんなに優しい女の子なのに……。
さっきの男（おそらく村長と思われる）の言葉が、胸に突き刺さる。
ぼくは、精一杯の笑顔で答えた。
「大丈夫。全然気にしてないよ！　君にそう言ってもらえてよかった」
全然気にしてないっていうのは……嘘になるかもしれない。
しかし、女の子はぼくの言葉を聞いて、とても喜んでくれたようだ。

「そうだ！　あなた達は旅の方ですよね？」
旅なんて大げさなものじゃないが、曖昧にうなずいておく。
「うちのトラちゃんを使って下さい！」
「トラちゃん？」
「うちで飼ってるんです。元々はこの森にいるモンスターなんですけど。人に慣れてるから大丈夫ですよ！　今連れてきます！」
そう言うと、少女はまた村の方へと駆けていった。
なんか嫌な予感……。

「これが、うちのトラちゃんです！」
そう言って少女が連れてきたのは、はじめこの国に来た時に襲われた、あの雑草モンスター――トリプスだった。
ぼくとトリプスはどうも相性が合わないらしい。
その『トラちゃん』は、ぼくを見るなりうなり声を上げ始めた。
そして、案の定、ぼくを追いかけ始めたのだった。

「あっ！　こら！　やめなさい！」

「うわあああああ！」

◇◆◇◆◇◆◇

ここは、アイオリアの都、アエロポリス。
賑やかながらも、気品ある城下町では、今日も新鮮な食材を売る市場の声が響いていた。
家々の白い壁が、春の日差しを受けて輝いている。
街の最深部には、円柱状の柱で支えられた、王宮が見える。
柱には植物の蔓が巻きついていて、どこか有機的で優美な雰囲気を醸し出している。
王宮の広間では、見るからに善良そうな顔をした老若男女が、目を輝かせながら、王の登場を今か今かと待っていた。
その人々をかき分けながら、後ろに数人の兵士を従えて、一人の男が歩いてくる。
王宮の奥へと続く扉に近づくと、見張りの兵士が、男に軽く会釈した。
兵士は、モヒカン頭のような飾りのついた兜をかぶり、サンダルを履いている。
「これはこれは、隊長どの」
「王はどこにおられる？」

少しいらだった調子で、男が尋ねる。
「中庭に行かれましたよ」
「中庭！？　お一人でか？」
「はあ。何でも大事なお客様がいらっしゃるそうで……」
客が来るなど聞いていない。男はあからさまに怪訝な顔になった。
「客？」

◇◆◇◆◇◆◇

「ねえシーア。これって端から見たら結構恥ずかしいよね」
「言うなよ。これだって歩くよりゃ速いんだぜ」
森を抜け、村を出て、小高い丘に辿り着いたぼくたちは、トリプスの背に揺られながら、一路、都を目指していた。

「ほら、見えてきたぜ。王都アエロポリスだ」
丘から見下ろしたところは、一面の草原になっている。
シーアが指差した先を見て、ぼくは息を呑んだ。

丘の下は、その街を除けば、ただただ草原が広がるばかり。
大海原に浮かぶ一艘の舟のように、都は草原の中に忽然と姿を現した。
真っ白な建物と青々とした草原との、コントラストが美しい。
街は円形の城壁に囲まれているのだが、城壁の外まで建物がはみ出していて、大きな街であることがわかる。
街の奥の方には王宮らしき巨大な建物と、神殿のようなものが見えた。
どちらも白大理石でつくられたエンタシスの柱。
ぼくは、古代ギリシャの遺跡を思い出した。
「すごい……」

ぼくが思わずつぶやくと、横に座っていたシーアが得意そうにほほ笑んだ。
「この地は……いや、このアイオリアから北のチュートニア、東のアディスに至るまで、かつてテラスティアという巨大な国が支配していたんだ。アエロポリスはそのテラスティアの遺跡の上につくられた街だ。だから今でも千年前の雰囲気を残している。ほら、街の周りにもいくつか遺跡が見えるだろ？」
普段は無口なシーアが、急に饒舌に話しだしたので、ぼくは驚いてしまった。
でも、見れば確かに、街の周りに遺跡のようなものが見える。
城壁の周りには、朽ちた神殿の柱や、がれきが散乱している。
その遺跡群と、現在都に建てられている建物があまり違わないことから、シーアの言う通り、都は千年前の、テラスティアという国の様式を引き継いでいるらしかった。

それにしても……。
シーアの話に出てきた地名、すべて聞いたことがない。
ぼくは本当に、違う世界に来てしまったのだろうか……。

落ち込んでいると、聞き覚えのある羽音が頭上に響いてきた。
ドラゴンだ！
つい先ほどもぼくたちを苦しめたあのドラゴンが、都の上空を飛んでいた。
「まさか都を襲う気！？」
「もうそれほどの体力はないと思うが……見つからない方がいいな」
シーアとそう話した時、目の前で信じられないことが起こった。
突然、ドラゴンが飛んでいる付近だけが曇りだしたのだ。
そして雲の合間から閃光が走り、雷の筋がドラゴンに命中した。
あっという間に黒焦げになり、墜落していくドラゴン。
突然の出来事に、ぼくもシーアも何が何だか分からなかった。

「魔法だ……」
シーアがつぶやいた。
「大きな街には魔法を使える神官がいるんだ。きっと、都の神官が、雷の魔法で倒したんだろう」
魔物や魔界が存在するくらいだ。魔法と聞いても、もはや驚かなかった。
でも、すごいな。
弱っていたとはいえ、あんなに強いドラゴンを一撃で仕留めるなんて！

ドラゴンの末路を見届けてから、ぼくたちは再び都を目指しトリプスを歩ませた。
いよいよ『プネウマの鏡』のある、都へ。
それを壊せば、母さんをロバートから取り戻してもらえる。
本当に、そんなことができるんだろうか？
仮にできたとして、ぼくは無事に元の世界に帰ることができるんだろうか。

胸にあるのは、不安か、期待か。
一歩一歩都に近づくたび、ぼくは、胸の鼓動が早まるのを感じていた。

第九話　王宮へ

シーアの予想は当たっていた。
都の上空を飛ぶ魔物を仕留めたのは、都の神官、アーサー・クロアであった。
水色の髪を緩く束ね、白い上着を羽織っている。
「全くどうなっているんでしょうね、都の警備は……」
「アーサー様、お一人で倒すなんて無茶なことを……」
付き添いの兵士が、心配そうに言った。
兵士の手には、神官が集めた薬草が持たされている。
「あんなの雑魚ですよ。どういうわけか手負いでしたし」
神官は、手近に生えていた薬草を採った。
「おっと。早く王宮に戻らないと王様に叱られちゃいますね」

◇◆◇◆◇◆◇

通りを馬車が行く。市場から商人たちの声が聞こえてくる。
肩に大きな袋を担いだ旅人、干し草を積んだ車を引くロバ、腰に剣を差した鎧の兵士。
本の中に出てくるような街の光景に、ぼくはただ唖然としていた。
城壁の門をくぐり、都に入ったぼくたち。
あの女の子に借りたトリプスは、街の外に置いてきた。シーアが森に戻るときに、返してくれるそうだ。
「向こうに見えるのが居住区。右奥に見えるのが大神殿だ。そして……」
シーアが言うよりも先に、ぼくはつぶやいていた。
「あれが……王宮」
街の最深部に、飛びぬけて大きな建物がそびえたっている。
遠くから見たときよりも、はるかに大きい。

白大理石の柱で支えられたその建物に、たくさんの人が出入りしているのが見えた。
兵士らしき姿も見える。

「じゃ……俺はこれで」
「えっ」
ぼくは思わずシーアの方を見た。
そうだ。都まで連れて行ってもらう、っていう約束だったもんな。
都に着いたら、もうお別れだ。
でも……。
「品物売るところまで手伝うよ！　ほら、仕事手伝うって言ったし！」
無理に頼んで都まで連れてきてもらったんだ。このまま別れるのはなんだか悪いような気がした。
しかし、彼は軽く追い払うような仕草をして、言った。
「いーよ別に。それより王宮に用事あるんだろ？　早く行けよ」
「うん……。ありがとう、シーア」
シーアは軽く肩をすくめた後、踵（きびす）を返し、さっさと反対方向に歩き始めた。
もともと人間嫌いだって言ってたくらいだ。彼らしく、実に淡白な別れ方だった。
でも、もう二度と会えないかもしれないのに……。
ちょっぴり寂しい気持ちになりながら、王宮に向けて歩き出そうとした時だった。
「あっ。そうだ」
シーアが、ふと思い出したように、こちらを振り返った。
「持ってけ」
腰のベルトから何かを取り出し、こちらに向かって投げる。
取り落とさないように気をつけながら、それを受け取って、手の中を確認すると……。

それは、短剣だった。
複雑な組み紐模様のついた、黒い鞘。
シーアが、あのドラゴンと戦ったとき、使っていたものだ。
「やるよ。丸腰じゃ何かと不便だろ」
ぼくが、ドラゴンと戦う時、武器がなくて困っていたのを知っているのだろうか。
熱いものがこみあげてきて、ぼくは叫んでいた。
「シーアー！！　いろいろとありがとうー！！　元気でねー！！」
再び向きを変え、歩きだそうとしていたシーアに向けて、大きく手を振る。
シーアは後ろを向いたまま、そっけなく手を振り返した。
……そして、今度こそ本当に、立ち去って行った。

「さて、と……」
ぼくは、もらった短剣をズボンのベルトに差し込むと、王宮の入り口へと続く階段を上がっていった。

いろいろあったけど、ついにここまで来たんだ。
あとはプネウマの鏡さえ壊せば……。

◇◆◇◆◇◆◇

王宮に入ったぼくは、驚いた。
入り口のすぐ先は大広間になっているのだが、そこに溢れんばかりの人がいたのだ。
街の人であろうエプロン姿の人から、旅人らしき人まで、様々な人たちが、王宮の大広間に詰めかけていた。
荘厳な王宮の様子を想像していたぼくは、すっかり拍子抜けしてしまった。
どうして王宮の中にこんなに人がいるんだろう。

ぼくは、近くにいた男に尋ねてみることにした。
見るからに人の良さそうなおじいさんで、ぼくを見てにっこり微笑んで答えてくれた。
「お前さん、他所から来たのかい？　王様は毎日この広間にいらっしゃっては、ワシらの質問や要望に直接応えて下さるんじゃ。だから皆、王様に話を聞いてもらおうと詰めかけとるんじゃよ」
へぇ……。
「あ、ほら。いらっしゃったぞ」
彼が指差した先に、それらしき人物が見えた。
周りを兵士に守られながら、一段高くなった場所に立っている。
全身をすっぽり覆ったローブに、白いベールという、質素な出で立ちだ。
ベールを目深に被っているので、顔はよく見えない。

王が現れたことで、広間が騒がしくなった。
おじいさんの言った通り、広間にいた人々は一斉に王に詰めより、質問や要望を投げ掛けている。
ここからではあまりよく見えないが、王は動じることなく、ゆったりとした語り口で一人一人に応対しているようだ。
だけど、どうやってプネウマの鏡を探そう……。
この様子だと、とても王に近づけそうにない。
と、その時……。
「あっ！　デューク！　どこに行くんだよ！」
肩にとまっていたデュークが、勝手に飛び立ってしまった。
周りにひしめいている人々を必死にかき分けながらデュークを追うと、デュークは広間の脇にある廊下へ向かったようだった。
勝手に王宮の内部へ入っていいのかどうか、一瞬悩んだが、このままデュークを放置するわけにもいかないので、ぼくは後を追うことにした。

◇◆◇◆◇◆◇

廊下の先は、中庭になっていた。
建物が中庭をぐるりと囲み、回廊になっている。
中庭の真ん中には優美な噴水があり、周囲には豊かに茂った広葉樹が植えられている。
しまった！
中庭に見とれているうちに、デュークを見失ってしまった。
中庭の木の枝にでもとまったのか？
そう思って、植えられた木を見回していると、女の人の後ろ姿が目に入った。
白いワンピースを着て、腰のところを紐で留めている。肌が透けて見えそうなほどに薄く、軽やかな服だ。そして頭には、絹と思われる上品なベールをかぶっていた。
その姿には見覚えがあったが……その時はそれが何なのか、思い出すことができなかった。
ぼくは彼女に、デュークを見なかったか、尋ねることにした。
「あの……」
声をかけると、彼女は優雅な動きで振り返った。

……ぼくは息を呑んだ。
目元を覆い隠してしまうほど長いまつ毛に、すんなりとした鼻、きゅっと結ばれた上品な唇。振り向きざま、ふんわりと良い香りがした。
ぼくはこれほどまでに美しい女の人を見たことがない。
この時の気持ちをなんと表現したらいいんだろう。
ぼくは、一目で彼女のとりこになってしまったのだ。

彼女がかぶっていたベールをとると、日の光を直に受けて白い肌がますます際立った。

あまりの美しい光景にクラクラしながらも、ぼくはあることに気がついた。
髪の色が――ちょうど空の色のように――水色だったのだ。
水色の髪なんて、見たことも聞いたこともない。しかし、その水色の髪は彼女の美しい顔立ちに違和感なく溶け込んでいる。
「あのー…何か私に用があるのでは？」
「あっ、すいません！」
いけない、いけない。
彼女に見とれて、声をかけた理由を忘れるところだった。
「黄色い鳥を見ませんでしたか！？　こう、トサカみたいな羽の立った……」
すると、彼女は惚れ惚れするほど美しい微笑みで、答えた。
「それは、この子のこと？」
彼女が軽く手を挙げると、どこからかデュークが飛んできて、彼女の手にとまった。
一体どうなってるんだ？

「どうもありがとう！」
無事デュークを見つけたぼくは、本来の目的を忘れ、木の下に腰かけて、その水色の髪をした彼女と“おしゃべり”をしていた。
「ぼく、エンノイアっていいます！　あ、こいつはデュークで」
ちゃっかり自己紹介しておく。
「ふふ。私はルイーズよ。よろしくね、エンノイア、デューク」
そう言って、ルイーズはぼくの手を握った。
ふわあああああ……。なんて柔らかい手なんだろう。
彼女はぼくよりもずっと年上のようだ。母さんと同じくらいの歳かもしれない。つまり、三十歳くらい。
カジュアルで童顔の母さんとは違って、かなり大人っぽい。でも、老けてはいない。
要するに、なんていうか、色っぽい。

その「大人の魅力」みたいなものに、ぼくは終始ドキドキしっぱなしだった。
「さてと、そろそろ行かなくっちゃ」
ルイーズが立ちあがった。
ベールを取り出し、かぶる。
その様子を見て、ぼくは電撃が走ったように閃き、無意識にある言葉を発していた。
「もしかして……王……様……？」

ルイーズが驚いたように目を見開いて、ぼくを見ている。
自分でもなぜそう思ったのかわからない。
王様はさっき広間にいたじゃないか。
服装も違うし、時間的に考えても、さっき広間にいた王らしき人物がルイーズだとは思えない。
それなのに、直感とでもいうのか、ルイーズこそが『王』だ、という気がしてならなかった。

しばらくの沈黙。
ぼくが変なことを言ったので、怒ったのかもしれない。
ぼくは、不安になってきた。
しかしルイーズは、なんとも気の抜けるような明るい声で言った。
「あら？　どうしてばれちゃったのかしら？」
手を顔に当てながら、いたずらっぽく笑っている。
えええ！？
そ、それって、どういう……。
すると、彼女はくすくす笑いながら、
「広間にいたのは私のイトコよ。私たち、姿が似ているから、時々ああして代わってもらうの」
おいおい、王様がそれでいいのか……。

ぼくはすっかり気が抜けてしまった。
いいや。気が抜けている場合じゃないぞ。
ルイーズが王様とわかれば、やるべきことは一つ。
ぼくは、意を決して聞いた。

「プネウマの鏡を見せてください……！」

第十話　プネウマの鏡

アイオリアの王を前にして、ぼくは頼んだ。
プネウマの鏡を壊せば、母さんを取り戻せる。今はただ、そのことだけが、頭にあった。
「いいわ」
意外にも、アイオリアの王、ルイーズは、こともなげに答えた。
しかし、気のせいだろうか……。彼女の表情が、少し曇った気がするのは。
心なしか、彼女の目が、ぼくを哀れんでいるように見えた。

ルイーズに付き従って、王宮の廊下を進む。
いくつもの廊下と階段を通り、最上階の、最も奥にある部屋へと辿り着いた。
部屋の前には、二人の兵士が控えている。他の兵士たちと同じように、モヒカン頭のヘルメットを被り、腰に差した剣の他に、手には槍を持っている。
「陛下！　もうお戻りですか？」
「ええ、通してちょうだい」
兵士たちは初めぼくをいぶかしんだが、やがて道を開けた。
植物の蔓が描かれた優美なデザインの扉が、兵士によって開かれる。

扉を開けると、中は体育館のように大きな部屋が広がっていた。
王宮の正面と同じように、この部屋にも壁面や柱に植物の蔓が巻き付いている。
部屋の入り口から見て左側には大きなバルコニーがあり、春の陽がさんさんと射し込んでいた。そして、右側には……。

聞かなくてもわかる。プネウマの鏡だ……。
二メートルほどもある大きな姿見。鏡の縁には奇妙な文様が彫り込まれている。
何かが映っているようだが、ここからではよく見えない。
「この鏡は、この世と魔界を隔てているのよ。この国にとってなくてはならない物なの」
ルイーズが話し出した。
「だから……」
ルイーズはぼくの目を見て、静かに言った。
「誰かに壊されでもしたら、大変なことになるわ」
「！！」
ぼくは、心臓が飛び上がるほど驚いた。
知っているのか……？　ぼくがこの鏡を割りにきたことを。
目の前が真っ暗になる。緊張と恐怖で息ができない。
バレていたんだ、始めから……。
さっきまでは美しいと思っていた彼女の姿が、恐ろしい魔物のように歪んで見えた。

「――丈夫？」
「え……？」
「大丈夫？　顔が真っ青よ」
気がつくと、ルイーズはぼくの肩に手を乗せ、心配そうに覗き込んでいた。
別段、怒ってはいない。どこか悲しそうに見えること以外は、さっきまでと変わらないようだった。
そ、そうだ、落ち着け。まだバレたとは限らないじゃないか。
改めてルイーズの方を見ると、相変わらず綺麗な、優しい顔で、魔物なんかではなかった。

「もしも……もしもこの鏡が割れたら……どうなるんですか？」
怪しまれぬよう、慎重に尋ねる。自分でも声が震えているのが分かった。
「魔界が現世にまで広がり、今まで以上に魔物があふれかえるでしょうね。そして人間も動物も、魔物に食われてしまうでしょう」
そんな……。

ぼくは悩んだ。
そんな大事になるなんて。ぼくはただ、母さんを取り戻したいだけなのに……。

一瞬にして、記憶がさかのぼる。

閑静な住宅街に建てた、庭のついた、大きな家。
父さんだって、昔は優しかった。休日はよく三人で出かけたものだ。
近所でも仲のいい家族として有名だった。

ある日、父さんは怪我をして、仕事を失い、その日から生活は一変した。
ぼくらは安いアパートに引っ越し、母さんも仕事を始めた。
それでも、三人が一緒なら、ぼくも母さんも満足だった。

しかし父さんは違ったようだ。
職を探そうともせず、酒ばかり飲み、毎日、夜の街を遊び歩いた。
母さんと喧嘩が絶えなくなり、暴力をふるうようになった。
母さんは毎日帰るはずもない父さんの晩ご飯を作っては、泣きながら捨てていた。

もう、母さんにそんな思いはさせたくないんだ。
母さんはばかだから、優しすぎるから。
ぼくが守らなきゃいけないんだ……。

不思議なことに、ルイーズは黙ったままのぼくを――どこか悲しそうな表情で――ずっと見守っていた。

ここはぼくの住んでいる場所とは違う世界だ。何が起きたって、ぼくには関係ない。
そうだ。
大変なことになる前に逃げればいいんだ……！

ついに、ぼくは決心を固めた。

その時、ルイーズが再び『大丈夫？』と聞きながらぼくに近づいてきた。
「すみません！」
「あっ！」
ぼくは彼女を軽く突き飛ばし、目の前に置いてあった椅子に手をかけた。
そう、これで鏡を割るのだ。
プネウマの鏡に近づき、手に持った椅子を大きく振りかぶる。そうして、椅子を鏡に向けて放り投げた――。

――いや、放り投げようとした。
しかし、それはかなわなかった。
驚くべきことに、気がついてしまったからだ。

「ぼくが……映ってない！　周りの景色は映ってるのにぼくだけ……どうして！？」

ぼくは叫んだ。
鏡に映っていたのは、椅子を振り上げたぼく自身の姿ではなく、逆さまになった椅子が、不自然に浮かんでいる姿だったのだ。
肩に、そっと手が触れる。
鏡の中では、ルイーズの両手が、何もない空間に置かれていた。
そして、そっとつぶやいた。
「この鏡はね、悪い心を持った人間は映らないのよ」

はっとして、振り返る。
ルイーズは、とても悲しそうな顔をしていた。
一気に、力が抜ける。
持っていた椅子を取り落とし、ぼくはへたり込んでしまった。
「ごめんなさい……ひょっとしてぼく……すごく自分勝手なことを……」
ようやく目が覚めた。
ぼくは、なんてひどいことをしようとしていたんだろう。
自分の身勝手な考えで、この世界を――シーアや、あの村の女の子や、ルイーズの住むこの国を――めちゃくちゃにしようとしていたんだ。
自分の浅はかさに、涙がこぼれた。

「思った通り……あなたは優しい人なのね。一度は悪い心に負けてしまったけれど、他人(ひと)を思いやる心はちゃんと持っている。ほら、もう一度鏡を見てごらんなさい」
ルイーズに言われて、恐る恐る鏡を見る。
まだ周りの景色に比べて、少し薄いけれど、今度はちゃんと、ぼくの姿が映っていた。
でも、『思った通り』って……？

ルイーズが言った。
「試すようなことをしてごめんなさい。あなたがどんな人間か、知りたかったの。ほんとはね……」
ルイーズはぼくが落とした椅子を拾った。そして、なんと鏡に向かってそれを投げたのだ。
鏡が割れる！
衝撃に備えて目をつぶろうとした時、鏡から光のようなものが出て、大きな音と共に、椅子を弾き返した。
ぼくは、慌てて鏡の表面を触る。当然ながら、傷一つ付いていない。
「プネウマの鏡はそう簡単には壊れないわ」
彼女はそう言うと、振り向いて、微笑んだ。

「申し訳ないけど、プネウマの鏡を壊せば願いが叶うというのは嘘よ」
ぼくは、はっとしてルイーズを見た。
どうしてルイーズがそのことを……。

ルイーズが軽く手を上げると、先ほどと同じようにデュークが飛んできて、彼女の手にとまった。そして彼女はデュークを肩に乗せると、おもむろにことの真相を語り始めた。
その時のルイーズは、今までのようなやんわりとした雰囲気ではなかった。意志の強そうなその表情は、まさに王と呼ぶべき威厳に満ちたものだった。
「私は、アイオロスにあなたを連れてくるよう頼んだの。そして、私はあなたを試した。今のところ、合格と言えるわ」
「どうしてそんなことを……」
ルイーズは、大きく息を吸うと、ぼくの目を見て、静かに、ゆっくりと言った。

「あなたが、この国の新しい王だからよ」

ぼくの新しい運命が、今、始まろうとしていた。

第十一話　闇よりの使者　ｐａｒｔ　１

「え……？」

アイオリアの王、ルイーズが語ったのは、信じられない言葉だった。

ぼくが『この国の新しい王』……？

「それってどういう……」

こと、と言いかけた時、ふいにカタカタと物音が聞こえ始めた。

机の上にのせられていた花瓶が、音を立てて震えていたのだ。

「！？」

ついに、花瓶は机から滑り落ち、割れてしまった。

途端、空気が淀む。妙な圧迫感で、息が詰まりそうだ。

ルイーズの表情から、緊張が見てとれる。何か、禍々しい事態が起こっているのだということは、ぼくにもわかった。

突然、バルコニーからものすごい風が吹き付けた。

思わず目を閉じる。

風がおさまったところで、薄目でバルコニーの方を確認すると、どこから入ったのか、黒いローブを着た男が立っていた。

その男を見た瞬間、ぼくは恐怖で凍りついた。

目はフードで隠されているが、まるで生気のない顔。ローブから覗いた手は、妙に青白く、不自然に節くれだっていた。

「面白いものを見せてもらったよ」

男が口を開いた。耳に残る、ざらついた不快な声。

ルイーズは男を見るなり、顔をこわばらせ、叫んだ。

「バイバルス……！」

バイバルスと呼ばれたその男は、神経を逆撫でするように、クククと笑った。
「覚えていて下さって光栄です、陛下」
わざとらしくお辞儀をする。
会話の様子から、ルイーズと男は面識があるようだった。それが決して好意的な関係でないことは、一目瞭然だ。
「近頃、魔物に町や村を襲わせているのはお前ね、バイバルス！一体何が目的なの！？」
男は、なおもからかうように笑い続ける。
「あのお方がもっと多くの魂を集めよ、と仰るのでね……」
ルイーズの美しい顔が、怒りで歪む。
「ここはお前のような者が来る場所ではないわ！　早々に立ち去りなさい！」
ルイーズは、大きく右手を振りかざした。すると驚くべきことに、何もない手の中から、巨大な炎が放たれた。
「魔法！？」
ぼくは叫んだ。
そうだ！　これこそが、シーアが言っていた『魔法』に違いない。文字通り、ルイーズは何もない空間から炎を生み出したのだ。
放たれた炎は、ローブの男めがけて一直線に飛んでいった。
しかし、男は全く動じる気配がない。
そして、炎が男を包み込もうとしたまさにその時……！

まるで、男の周りに見えない壁があるかのようだ。炎はバリアのようなものに弾かれ、あとかたもなく消えてしまった。
男は火傷一つ負っていない。
この状況を楽しんでいるのか？　不気味な笑みを浮かべながら、言った。
「いやいや、相変わらず貴女の魔力は素晴らしい。だが……」
男はどこからともなく杖を取り出した。本の中の魔法使いが持っ

ているような、先の曲がった木の杖だ。
「今の私にはかなわんよ！」
叫ぶと同時に、男は杖から炎を放った。
何もない空間から炎を生み出したのはルイーズと同じだが、男の場合、その炎の規模がまるで違っていた。それは、あの村を焼いたドラゴンの炎に匹敵するほどだ。
ぼくが立ちつくしていると、ルイーズはぼくを突き飛ばした。そして、ぼくをかばうようにして、その炎をもろに受けてしまった。
「キャアアアアア！」
恐ろしい悲鳴。
思わず目を閉じたぼくは、その姿を見ることができなかった。

しばらくして、炎がおさまった。
通常の炎なら、こんな短時間に炎が勝手におさまるということはないんだろうけど。きっと魔法の炎だからだろう。炎は次第に弱まり、部屋には煙だけが残った。
「王様！」
なんと、ルイーズは無事だった。服は無残に焼け焦げているが、肌には煤が付いているだけで、火傷は一切していなかった。
ぼくは、倒れているルイーズに駆け寄った。
よかった。意識はあるようだ。

「直前にバリアを張ったのか。やはりなかなかあなどれん。しかし、その美しい顔に傷がつかなくてよかったよ」
他人事のように話す男。ぼくは心の底から怒りがわいてきた。
事情は知らないけれど、この目の前にいる男が、とんでもない悪党であることだけは間違いなかった。
ぼくは怒りのままに、男に向かって叫んだ。
「お前何者だよ！？　どうして王様にこんなひどいことを！　許さないぞ！」

男は全く動じることもなく、むしろ興味深げにぼくをまじまじと見た。
「ほう……面白い。お前が新しい王だな？　しかもその服装……異世界のものだな」
「！？」
ぼくは動揺した。
普通、『異世界』などという概念を、容易に理解できる人間がいるだろうか？　実際に『異世界』と思われる場所へ来てしまったぼくでさえ、信じられないのに。
しかし、この男はいとも簡単にぼくが違う世界から来たことを見破ったのだ。

その時、倒れていたルイーズが、ぼくの名前を呼んだ。
「……げて」
「え？」
「逃げて……！」
ルイーズの悲痛な叫び。
ぼくは叱りつけるように、言った
「逃げません！　王様を置いていけるわけないでしょう！？」
この女性（ひと）がぼくにとって敵なのか、味方なのか、まだわからない。
ひとを勝手に試したり、違う世界に連れてきたり。ひどいと思う。
それでも今は、この女性（ひと）を守らなければいけない。
なぜだかわからないけど、ぼくは、そう思った。

第十二話　闇よりの使者　part　2

男はすでに、次の攻撃に移っていた。
「誰が王になろうと同じこと……私の邪魔はさせん！」
男から、無数の黒い糸のようなものが飛び出した。
その糸はルイーズをしばりあげると、彼女を高々と持ち上げた。
巻きついた糸が、彼女の腕や胸を痛々しく締め付けている。
ぼくはルイーズを助けようと、走りだした。
しかし、一瞬ふわりと浮きあがる感覚がしたと思うと、みるみる床が遠ざかっていった。
「うわあああ！？」
いつの間にかぼくの足にも糸が巻きついていたようだ。右足に巻きついた糸で持ち上げられ、ぼくは、逆さまの状態で、宙づりになってしまった。
当然、全体重を支えることになってしまった右足。足の付け根が、引き裂かれそうなほど痛んだ。
「何するんだよ！　放せよ！」
男は全く見向きもしない。
「バイバルス、エンノイアを放しなさい！　その子は関係ないはずよ！」
「さてね。それはどうかな。この少年はいずれ王になるのであろう？」
男の声のトーンが変わった。
「ならば……今のうちに始末しておいた方が都合がいい」
「うあ……っ！」
男が言うと同時に、巻きついた糸が足に食い込んだ。強烈な痛みが走る。
まずい。このままじゃ、本当に殺される……！

母さんの顔が浮かんだ。
お願いだ。せめて、もう一度だけ、母さんに会いたい。
だから、それまでは死にたくないんだ……！

「ピピッ！」
デュークが、心配そうにぼくを見ていた。
しかし、残念なことに、鳥であるデュークにはどうすることもできないようだ。
「ごめん……。ぼく、もうだめかもしんない……」
ぼくは、デュークに言った。

コツン。
デュークは、クチバシでぼくのズボンのベルトをつついた。
コツコツコツコツ。
注意を引くように、何度もつつき続ける。
「何だよデューク。ベルトがどうかして……」
ぼくははっとした。
そうだ！　シーアにもらった短剣！
王宮へ入る前。シーアは、丸腰では不便だろうということで、ぼくに短剣をくれた。
その短剣をぼくは、ズボンのベルトに挟んでいたのだ。

ぼくは、男を見た。
ルイーズに何か言っているようで、今はぼくの方を見ていない。
ぼくは気付かれないように、慎重に手を伸ばした。
逆さまの状態で腰に手を伸ばすというのは、かなり根気のいる作業だったが、ようやくベルトに挟んだ短剣に手が届いた。
そっとその短剣を鞘から抜き取る。
剣を持つことなど、初めてだ。

抜き取った瞬間、手にずしりと重みが伝わった。
ぼくは初め、その短剣で糸を切ろうと思った。
しかし、この姿勢で足に巻きついた糸を切るというのは、到底無理だった。
そこでぼくがとった行動は……。

ヒュンッ！

ドラゴンを射るのには失敗したぼくだったが、今度は上手くいった。
短剣は風を斬りながら、真っ直ぐに男の方へと飛んでいった。
男は慌てて振り向くと、先ほどと同じようなバリアを張った。
そしてそのバリアに、短剣ははじき返されてしまった。
しかし成果はあった。
突然のことに、男はひどく動揺したようだ。
そのせいなのか、一瞬ぼくに巻きついていた糸が緩んだのだ。
ぼくは足を振りまわし糸から抜け出した。
「しまった！」
男が叫ぶ。
高いところまで持ち上げられていたので、糸から抜け出した瞬間、床に激しくたたきつけられた。
しかし、痛がっている場合ではない。ぼくはすぐさま入り口のドアへと駆けた。
ドアに手をかけたところで、ふと思案し、ぼくは男とルイーズのいる方へ振り返った。
「王様ー！　必ず助けるからねー！」
ぼくはルイーズに向かって叫んだ。
見捨てるんじゃない。見捨てるんじゃないんだ。

だけど今のぼくは、ここにいても、どうすることもできない。
だから……どうする？
どうすればいい！？

「エンノイアー！」
その時、ルイーズがぼくの名前を呼んだ。
「エンノイア！　リュクルゴス隊長を呼んで！」
「え！？」
リュクルゴス隊長って誰……！？
「広間にいるはずよ！　お願い……リュクルゴスを……リュクルゴス隊長を呼んで！」
「わ、わかった！」
それが誰なのか、その人を呼んだらどうなるのか、わからなかったが、とにかくぼくは部屋の外へと走った。

「ほう。その隊長とやらが来るまで待っていてやろうではないか」
男は不敵に笑った。
「……後悔するわよ」
それに対抗するように、ルイーズは強気な笑みを浮かべた。

第十三話　リュクルゴス隊長

＞i35597―3781＜

「リュクルゴス隊長！　助けてください！　リュクルゴス隊長ーっ！」

声の限りを尽くして、ぼくは広間の入り口で名前を呼んだ。広間にいる人々が、驚いて振り返る。

「リュクルゴス隊長ーっ！」

◇◆◇◆◇◆◇

ローブの男から辛くも逃げ出したぼくは、「リュクルゴス隊長」を呼ぶために、この大広間へと戻ってきた。幸い邪魔をされるようなことはなかったが、広間を目指し走るぼくが目にしたのは、恐ろしい光景だった。

見張りの兵たちが、扉の前で見るも無残な状態で死んでいたのだ。骨が折れているのか、不自然な格好でぐったりしていた。

おそらくあの男がやったのだろう。よく見ると、死んだ兵士たちの体には先ほどの黒い糸が巻き付いていた。

ぼくは、悪寒がした。

こんな騒ぎになっているというのに、兵が誰も駆けつけないというのは、どおりでおかしいと思った。

早くしなければ、ルイーズが危ない……！

◇◆◇◆◇◆◇

「リュクルゴス隊長ーっ！」

もう何度目になるかわからない。さすがに声がかすれてきた。と、その時……。
「どうしたボウズ！？」
突然、肩に手が置かれた。声の主を見上げると、黒髪の、がっしりとした男だった。長いマントを羽織り、腰には剣を差している。
そうか！　この人が……！
「リュクルゴス隊長！？」
「自分がそうだが……」
「王様が大変なんです！　ローブの男が現れて……！」
男の言葉を待たず、ぼくはルイーズの窮地を必死に伝えた。
リュクルゴス隊長はひとつうなずくと、すぐさま数人の兵士を引き連れ、ルイーズのいる部屋へと向かった。ぼくも慌ててついて行く。

リュクルゴス隊長と兵士たち、そしてぼくは、バタバタとルイーズのいる部屋へと入った。扉はぼくが隊長を呼びに行く時に開けたままになっていた。
「陛下ーッ！」
「王様ーッ！」
糸に縛られ、不自然に空中に浮かんだルイーズ。首をもたげてぐったりしていた。
ま、まさか……。
ぼくや兵士たちも、最悪の事態を考えた。
「大丈夫……。気絶しているだけだよ」
ぼくたちの考えを見透かしたかのように、ローブの男は言った。
その言葉が余計に癇に障ったようで、リュクルゴス隊長は顔を真っ赤にして男を睨んだ。
「貴様ッ！　陛下を離せ！」
「残念ながらそういうわけにはいかんね。力ずくで取り戻したらどうだね？」

リュクルゴス隊長はスラリと腰の剣を抜くと、真っ正面から男に向かっていった。
「正面から攻撃するなどバカなことを！」
男から黒い糸が放たれた。
糸が隊長に巻き付こうとしたその時、隊長は大きく剣を振りかぶった。
そしてなんとその剣で糸を叩き切ったのだ！
そのまま勢いよくローブの男を斬る。剣は男の腹をえぐり、刃の先に鮮血が舞った。
「く……くそ……」
男はよろけながら、膝をついた。
ルイーズがこの人を呼べと言った理由がわかった。

強い！
ぼくは、初めて見る本物の剣技に、興奮していた。

第十四話　恋人

「あっ！　落ちる！」

ローブの男がひるんだため、ルイーズを縛り、宙に持ち上げていた糸が緩んだ。当然、ルイーズの体は重力に従って落下し始めた。

ぼくの声を聞くやいなや、リュクルゴス隊長は剣をしまうと、素早く体の向きを変え、落下してくるルイーズをしっかりと抱き止めた。

おおおお！

思わず歓声をあげたぼく。

つられて、待機していた兵士たちまでが歓声をあげた。拍手なんかしちゃってるし。

「感心している場合か！　さっさとアイツを縛り上げろ！」

クスッ。怒られてる怒られてる。

隊長に怒鳴られて、兵士たちはワタワタと、傷を負って倒れているローブの男を縛りにかかった。

「う……」

その時、隊長に抱き抱えられていたルイーズが目を覚ました。

「陛下！　ご無事ですか！？」

「リュクルゴス！？」

ルイーズは、はっとして隊長を見た。

「あなたが助けてくれたのね、リュクルゴス……ありがとう」

あ、あれ？　気のせいかな。ルイーズの頬がほんのり赤く染まったような……。

すると、リュクルゴス隊長は心底申し訳なさそうな表情で言った。

「いえ……。申し訳ありません、気づくのが遅すぎました。そのせ

いで陛下を危険な目に……」
ルイーズは慌てて首を振った。
「いいえ！　こうして助けてくれただけで充分よ。よくぞ来てくれました」
リュクルゴス隊長はくしゃっと笑った。
「そりゃ、貴女のためなら地の果てだって助けに行きますよ」
「リュクルゴス……」
ルイーズの頬が一層赤くなったように見えた。
リュクルゴス隊長はルイーズを優しく下ろすと、先ほどの炎のせいで服が焦げ、白い肌があらわになってしまったルイーズに、慣れた様子で自分のマントを着せてあげた。
隊長を見つめるルイーズの目は、母さんがロバートを見る時のそれに、よく似ていた。

なんだ、そういうことか……。

ぼくは、わかってしまった。そう、この二人は……。
そう思った途端、さっきまで興奮していたのが、なんだかモヤッとした気持ちになった。
それから、胸がチクチクしてきた。

所在なくて、二人の側を離れようとした時、ルイーズに声をかけられた。
「ありがとうエンノイア」
「そんな。ぼくは何もしてないです」
「何もだなんて。あなたは私を見捨てなかった。そして、リュクルゴス……隊長を呼びに行ってくれた。すべてあなたのおかげよ」
ぼくは首を振った。
「いえ、そんなの全然大したことじゃありません。ぼくは……その……隊長さんみたいに強くないし……」

「え？」
ルイーズはなぜそこで隊長が出てくるのかわからないといった感じで、小首を傾げた。突然引き合いに出されて、隊長も驚いているようだった。
あああ……ぼくは何を言ってるんだろう。
なんだか恥ずかしくなって、ぼくはそそくさとその場を離れた。

リュクルゴス隊長はルイーズをかばうようにして立つと、兵士によって縛られたローブの男に再び剣を突きつけた。
「貴様、何者だ？　陛下を傷つけた罪、万死に値するぞ！」
隊長は毅然として言い放った。
こんな状況になっても、ローブの男はククク……と笑っている。血が出ているというのに、痛がる様子もない。
「何がおかしい！」
すると、ローブの男が言った。
「私が何者か……。王様の方がよくご存知なのでは？」
そこにいた人々が一斉にルイーズを見る。

ルイーズは厳しい顔でうなずき、説明を始めた。

第十五話　闇に蠢く者

「この男はイスマイル・バイバルス。……かつてこの国の政治家だった男よ」

ルイーズは、このローブの男について説明を始めた。その内容を要約するとこうだ。

ルイーズとこの男はかつて大学の同級生だった。二人は友人で、毎日、理想の国のあり方について語り合っていた。そして同じ理想を持って、この王宮へ入った。

しかし……ルイーズとバイバルスの考えは次第に食い違っていった。ルイーズは他民族との調和を望み、国内の安定を目指したのに対し、バイバルスはテラスティア――――昔このアイオリアを含む広大な大地を支配していたという王国（シーアが話していた）――――の再建、すなわち国土拡大を望んでいた。

当然ルイーズはその考えを断固拒否した。しかし自分の望みがかなわないと知るや、バイバルスは不穏な動きを見せるようになった。今度は魔界に傾倒し、国内で禁止されている怪しげな魔術に凝るようになったのだ。

それでルイーズはバイバルスを国から追放した……。

それが、この男とルイーズとの因縁だ。

ちなみにリュクルゴス隊長はそのころ王宮にはいなかったので、バイバルスとは面識がないらしい。

「それで、陛下を襲った目的は何なのだ？　追放された復讐か？」

リュクルゴス隊長が、剣を突きつけたまま、目の前のローブの男・バイバルスに聞いた。

バイバルスは急に笑うのをやめ、ぞっとするような低い声で答えた。
「貴様らには理解できん。崇高な目的のためだ」

◇◆◇◆◇◆◇

隊長とルイーズは何かを話し始めた。
ぼくはそろそろ退屈し始め、辺りをうろうろしていた。と、ふと縛られているバイバルスの手元を見ると、ローブの袖に何か光る物が見えた。
何だ……？　金属みたいな……。いや、短剣だ！
ぼくがさっき投げた短剣を、コイツはこっそり袖に忍ばせていたのだ。
「隊長さ……」
隊長にそのことを伝えようとしたが、時遅し。隊長が振り返った時、バイバルスは器用にもすでにその短剣で手首のロープを切っていた。そしてすぐさまその短剣を持つと、ルイーズに向かっていった。
「キャアア！」
一瞬の隙を突かれた。強盗なんかがよくやるように、バイバルスはルイーズの喉元に短剣を突き付け、彼女を人質に取った。
「誰も動くな！　動けば王の命はないぞ！」
「クッ……」
隊長含め、誰一人動くことができなかった。

バイバルスはルイーズを連れたままバルコニーに出た。そしてバルコニーの手すりに上ると……そのまま飛び降りてしまった！
「なっ！？」
兵士たちが一斉にバルコニーに駆け寄る。ぼくも慌ててバルコニーに出た。

ここは三階だ。ルイーズを抱えたままで、普通に着地するというのは難しいだろうが！？

下を見下ろそうとしたちょうどその時、彼方から耳慣れた羽音が聞こえた。

ワイバーン！

都に来る途中に戦ったあのドラゴンと同じ外見をした魔物が、こちら目がけて飛んできた。そして素早くバイバルスとルイーズを背中に拾い上げると、再び彼方へと飛び去ってしまった。

そう、ルイーズは連れ去られてしまったのだ。

第十六話　救出作戦

ルイーズがさらわれた後、ぼくたちは広間へと戻った。ぼくは広間の隅にある椅子に腰かけながら、考えていた。

ぼくをこの世界に連れてきたのは、ルイーズだ。そして、ルイーズは連れ去られてしまった。かつてルイーズの友人だったという男、イスマイル・バイバルスによって。

あの瞬間、ぼくは目の前で一国の王が誘拐されたということに気が動転していて、それについて深くは考えていなかった。しかしこうして落ち着いてみて、初めて事態の深刻さがわかった。

――――ぼくは、元の世界に帰れなくなったのだ。

ルイーズがいない今、なぜぼくがこの世界に連れて来られたのか、その理由を知る術もなかった。

そして、ぼくはこれからどうすればいいのだろう？

生きていかなければならないのか？　この見知らぬ世界で？　魔物や凶暴なモンスターに満ち溢れた、この世界で？　母さんとも二度と会えないまま……。

知らず涙が零れた。

突然すぎる。あまりに突然すぎるよ……。

◇◆◇◆◇◆◇

「大丈夫か？」

うなだれていた頭にコツン、とコップを当てられた。見上げると、そこにはリュクルゴス隊長が立っていた。彼は手に持った飲み物をぼくに差し出し、心配そうにぼくの顔を覗き込んだ。

「陛下のこと、知らせてくれてありがとな。怖かったろう」
そう言って、隊長はぼくの頭に軽く手を置いた。わっと泣き出しそうになるのを、ぼくは必死でこらえた。
ルイーズがさらわれた時、一番動揺していたのはリュクルゴス隊長だった。がっくりと膝をつき、自分自身の愚かさを罵っていた。それが今では冷静さを取り戻し、ぼくを気遣ってくれている。
「すみません……。あの短剣を投げたのはぼくなんです」
そう。ぼくがルイーズがさらわれる原因を作ったのだ。あの時、短剣を拾ってさえいれば……。
「いいや、それはお前のせいじゃない。ちゃんとそういうことを確認しなかった俺や、兵士たちの責任だ」
リュクルゴス隊長は気を取り直すように、笑って言った。
「そういえば自己紹介がまだだったな。もう知っているかもしれないが、俺はリュクルゴス・ヘイロウタイ。こう見えても討伐隊の隊長だ」
リュクルゴス隊長は、黒の長い髪を後ろで一つに束ね、額にはバンダナを巻いている。いかにも軍人らしく、がっしりとした体には、皮でできた鎧を装備していた。歳は三十前後といったところだろう。
「ぼくはエンノイア・グノーヴァーです」
よろしく、と言いかけた時、広間で歓声が上がった。
見ると、広間で兵士たちが一様に整列していた。兵士たちの前には、中年の軍人が立ち、その男が『陛下を救出するぞ！』と一声叫ぶと、兵士たちが一斉に賛同の声を上げた。

ぼくは驚いてリュクルゴス隊長に尋ねた。
「助けに行くんですか！？　王様を！？」
「ああ、勿論だ。陛下は恐らく魔界に連れて行かれたのだと思うが、助けられる可能性がなくなったわけではない。すでに執政官から救出の命令が出ているしな」
そうか！　その選択肢があったんだ！　ぼくは、まだルイーズを

救えるかもしれない、ということを、すっかり失念していた。
「じゃあ、俺はそろそろ行かなきゃならん。エンノイア、大丈夫か？　一人で帰れるか？」
「大丈夫です！　ありがとうございました、リュクルゴス隊長！」
ぼくが元気を取り戻したことに安堵したリュクルゴス隊長は、整列している兵士たちの前に歩み出た。

「諸君。我らはこれより国王代理、執政官閣下の命によりて、国王陛下救出の任に就く。敵は魔界に通ずる非道の魔術師、イスマイル・バイバルス。だが同志たちよ、恐れることはない。我らアイオリア軍が力を合わせれば、恐れるものなど何もない。各々、心してかかるがよい……！」
そう言うと、リュクルゴス隊長は自らの剣を掲げた。兵士たちも同様に剣を掲げ、鬨（とき）の声をあげた。

広間の窓から差し込む光を受けて、無数に掲げられた兵士たちの剣が、きらきらと輝いていた。

第十七話　アイオロス

「デューク」
椅子から立ち上がったぼくの側に、デュークがおずおずと近づいてきた。
ぼくはデュークの目を見て、静かに言った。
「いや……アイオロスと呼ぶべきかな？」
『アイオロス』と呼ばれて、デュークは少なからずたじろいだ。

もう、ぼくには分かっていた。こいつはただの鳥じゃない。
こいつの名前はアイオロス。ルイーズのペットだか何だか知らないけど、こいつがぼくをこの世界に連れてきた張本人（鳥？）だ。
こいつはルイーズに頼まれて、ぼくをこの世界へと導き、時には手助けし、時にはぼくの力を試しながら、ぼくをルイーズと引き会わせた。
今まで聞こえていた声は、こいつの声だったんだ。でもそれは、心に語りかけるような感じで、直接話せるわけじゃない。こちらから声を聞こうとすることも無理だ。

「そうだろ？」
そう聞いても、デュークはいかにも鳥らしく、小首を傾げただけだった。

この世界に連れてきてしまった責任を感じてか、それとも正体がばれたせいか、今のデュークはどこかぼくにおびえているようだ。
元の世界に帰れなくなって、悲しいし、悔しい。さっきまでのぼくなら、デュークを罵って、ひっつかんで、投げ飛ばしていただろう。でも、ルイーズが助けられるかもしれないとわかって、ぼくの心は少し変わっていた。

ぼくはデュークに言った。
「一緒に行こうよデューク。もう怒ったりしないからさ」
ピイッ！
デュークは嬉しそうに一声鳴き、ぼくの肩にとまった。
「で……これからもデュークって呼んでいい？」
デュークは頷くように、うんうんと首を振った。
ふふ。可愛いやつ。

そうして、ぼくはデュークと共に王宮を後にした。

リュクルゴス隊長率いるアイオリアの兵士たちは今しがたルイーズの救出に向かった。
え？　ぼくはどうするかって？
勿論黙ってルイーズが救出されるのを待つわけじゃないよ。

街の外に出ると、そこにはまだリュクルゴス隊長たちがいた。長旅になるのだろう、たくさんの荷馬車も用意してある。

――ぼくは気付かれないように、そっとその一つに乗り込んだ。

「よーし！　しゅっぱーつ！」
掛け声とともに、馬車が走りだした。

ハアアアア。今日は本当にいろいろなことがあった。

草の上を走る車輪の振動を感じながら、ぼくは荷馬車に積まれた木箱にもたれて、心地よい眠りに落ちていった。

第十八話　二人の隊長

突然の衝撃に驚いて、ぼくは目を覚ました。
目を開けてもなお暗かったので、一瞬頭が混乱したが、すぐに自分の置かれた状況を理解した。
馬車が止まったようだ。外から声が聞こえてきた。
「よーし！　今日はここで夜営だ！」

ぼくは今、荷馬車の幌の中にいる。ルイーズの救出についていくため、こっそり乗り込んだのだ。
もちろん肩の上にはデューク。
「ピ！」
「しっ。静かに。見つかっちゃうよ」
グウウウウ。
おっと……デュークには静かにしろと言いながら、ぼくのお腹は静かではなかった。
「お腹空いたなあ……」
兵たちの晩御飯を用意しているのだろう。どこからか良い香りが漂ってきた。
ぼくはふと、寄りかかっていた木箱を見た。元からこの馬車に積まれていたものだ。
食べ物でも入っていないかな。そう思って木箱の蓋を開けると、残念ながら中に入っていたのは食べ物ではなかった。しかしその中身は、ぼくにとって空腹を忘れるほど魅力的な物であった。

「剣だ……」
木箱の中には、たくさんの剣が詰められていた。
ぼくはその一つを手に取ってみた。
長さは一メートル弱。鞘にも柄にも装飾はおろか模様さえついて

いないという実に質素なものだが、それでもぼくは大興奮。シーアには短剣を貰ったけど、こんなちゃんとした剣を握るのは初めてだ。

ぼくはそのときすっかり剣に見とれていた。だから、馬車の幌をめくる人の気配に全く気がつかなかった。

「おい子供！　そこで何をしている！」

◇◆◇◆◇◆◇

「だから違うって言ってるだろ！」

勝手に荷馬車に乗り込んでいたのを見つかってしまったぼく。なんと、剣を握っているところを見られてしまったせいで、あらぬ誤解を受けてしまった。

「いいか、もう一度だけ聞くぞ。なぜ我が軍の武器を盗もうとした！？」

盗むだなんてとんでもない！　ただ食べ物を探していたら、箱の中に剣が入っていたから手に取ってみただけなのに。

王宮にいた兵士たちと同じように、モヒカン頭のヘルメットをかぶった男が二人。さっきからぼくが剣を盗もうとしたと決めつけて、全く聞く耳を持たない。

「何事だ？」

男たちの後ろから、上官らしき人物が声をかけた。その貫禄のある低い声には聞き覚えがあったが、顔がよく見えない。

「はっ。この少年が荷馬車に積んであった武器を盗もうとしておりまして……」

「だから違うってば！」

「どれどれ？」

その上官らしき人物がひょいと顔を覗かせた。

あ、あ、あ！　リュクルゴス隊長だ！
向こうもこっちに気づいたらしい。目をまん丸にして驚いている。一度顔を会わせているため、なんとも気まずい雰囲気になってしまった。
しかし、驚くべきはここからだった。リュクルゴス隊長はオホン、と咳払いをすると、
「あ～……すまん。こいつは俺が雇ったんだ。剣の数を確認してもらってたんだ」
兵士たちにそう言った。
「そ、そうでありましたか。し、しかしこんな子供をお雇いになられたので？」
「子供にだって雑用くらいできるだろ。なあ？」
そう言ってリュクルゴス隊長はぼくに目配せした。
「は、はい」
ぼくは促されるまま頷いてしまった。
と、とりあえず助けてくれた……のかな？

「何事ですかな」
すると、もう一人、上官らしき男が現れた。
さっき広間で兵士たちの前に立っていた中年の男だ。おそらくリュクルゴス隊長よりは少し年上、髪には少し白髪が混じっていて、くるりとカールしたひげを生やしている。
その男は、リュクルゴス隊長を見るなり、大げさに驚いてみせ、すっとんきょうな声をあげた。
「おお！　これはこれは、リュクルゴス隊長ではありませんか。うちの兵たちに何か御用ですか？」
リュクルゴス隊長は、男に冷たい視線を投げかけた。
「別に。お宅の兵が私の雇った少年をいじめていたので、助けていたところですよ。では」

どことなく棘のある言い方のような気がする。中年の男は、ぼくを連れて立ち去ろうとするリュクルゴス隊長に、すかさず声をかけた。
「おお、そういえばリュクルゴス隊長！　話によれば、陛下が敵に捕らえられた時、陛下は名指しであなたに助けを求めたそうですね。広間にいた者があなたの名を叫ぶ少年を見たと言っていましたよ」
リュクルゴス隊長の動きが止まった。ゆっくりと男の方に向き直る。
「……それがどうかしましたか？」
男はフハハ、と笑うと、嫌味たらしく自分のひげを撫でた。
「不思議ですなぁ。王宮警備を担当している『衛兵隊』の隊長である私でなく、わざわざ『討伐隊』隊長であるあなたを呼ぶとは……」
やや間があって。
「何か”特別な理由”でもあったんでしょうか」
男は『特別な理由』という部分を妙に強調して言った。
ええっと、それはつまりどういうことだろう。ぼくにはよくわからなかった。
リュクルゴス隊長は一瞬沈黙したが、やがて肩をすくめて言った。
「それは……あなたが頼りにならないからじゃないですか？　俺に皮肉を言うために、わざわざ仕事をほっぽり出してくるような男は、そりゃ信用ならんでしょう」
男の顔がみるみる真っ赤になってきた。
リュクルゴス隊長は高らかに笑って、今度こそぼくを連れてその場を離れた。振り返って見ると、男は口汚く罵りながら、兵たちにあたり散らしていた。
な、何なんだ一体……。なんだか知らないけど、険悪な雰囲気。
それに、ぼくはこれからどうなっちゃうんだろう？

第十九話　道中　part　1

＞i35599―3781＜

「どうだぁー？　うまいかぁ？」

ペットに餌でもやっているような言い方だ。確かに今のぼくは、まるで動物のように、ご飯に貪りついていた。

馬車に乗っていたのを見つかってしまったぼく。挙句、軍の剣を盗もうとしたと勘違いされてしまった。そこで助け船を出してくれたのがリュクルゴス隊長だ。しかも、お腹を空かせたぼくを見かねて、食事まで出してくれた。

食事といっても一切れのパンと豆が浮いたスープだけだけど。シーアと数日間旅をして、こういう質素な食事には慣れたもんだ。

それで、とリュクルゴス隊長が話を切り出した。

「なんで剣なんか盗もうとしたんだ？」

思わず咳こんでしまった。やっぱりそうくるか！

「だ、か、ら！　盗もうとしたんじゃないんです！　食べ物を探してたら剣があったから、手に取ってみただけなんです！」

リュクルゴス隊長はやれやれ、といった感じで、首を振った。

「じゃ、質問を変えるが、なぜ勝手に馬車に乗り込んだんだ？」

ぼくは答えた。

「ぼくも王様を助けたいからです」

「なぜ？」

「王様にもう一度会いたいんです」

「なぜ？」

「王様に聞きたいから」

「何を？」

「それは……言えません！」
矢継ぎ早に繰り出される質問に、思わずべらべらと喋ってしまうところだった。

自分は異世界の人間で、この国の新しい王だから、ルイーズによってこの世界に連れて来られた。ぼくはルイーズに「新しい王」の意味と、元の世界への帰り方を聞きたい。

そんな話誰が信じるものか。自分だって信じられないのに。
頭のおかしい子だと思われて、警察（があるのかどうか知らないが）に突き出されたりしたら面倒だ。ここは、話さない方が得策だろう。
リュクルゴス隊長は軽く溜め息をついて、言った。
「まったく……仕方ないな。連れて行ってやるよ」
「ほんと！？」
「お前の意志が固いのはよーくわかったよ。ただし、仕事はちゃんとしろよ。そういう名目で助けたんだからな」

堂々といていいということになると、現金なもので、がぜん楽しくなってきた。ぼくは鼻歌を歌いながら、みんなの食事の準備をしたり、テントを張るのを手伝ったりした。
初めはぼくを奇異な目で見ていた兵士たちも、次第に話しかけてくれるようになった。そして、いろいろなことを教えてくれた。

アイオリア軍には二つの部隊があり、それぞれを、「衛兵隊」「討伐隊」という。
「衛兵隊」は主に王宮・都の警備を担当している。特徴はモヒカン頭のヘルメットに、サンダル。そういえば王宮で見かけた兵士たちも、さっきぼくを問い詰めていた兵士たちも、そんな格好をしていたな。古代の王国・テラスティアの服装なんだそうだ。そしてそ

の隊長が、先ほどの中年男というわけだ。ヴァシリス隊長というらしい。

もう一方の「討伐隊」は、地方都市の警備と、文字通り魔物の「討伐」を職務としている。近頃はあのワイバーン以外にも、さまざまな魔物が現れては、町々を襲っているそうだ。魔物の襲撃の情報が入れば、近くの都市に駐屯している討伐隊が、それを退治しに行くというわけだ。

――ぼくはあの、ワイバーンに襲われた村のことを話した。しかし、残念ながら今のところ、小さな村などには手が回らないらしい。

それから、討伐隊の服装は特には決まっていない。マントを羽織っている人が多いかな。あとはシャツやチュニックの上にベスト、あるいは革でできた鎧を着ているといった具合だ。

隊長はリュクルゴス・ヘイロウタイ。今さっきぼくに食事を出してくれた、あの人だね。彼もまた他の討伐隊の人々と似たように、シャツの上に緑色のベストを着て、マントを羽織っている。

ともかく、リュクルゴス隊長はぼくを助けてくれたうえ、すごく気さくな人だったので、ぼくは彼のことがとても好きになった。

彼がルイーズを助けたときのことを思い出すと、なんだかもやもやするけどね。いや、ヤキモチとかじゃなくて。

戦争や大きな任務の時は、どちらの隊も駆り出されるそうだ。だから、今ここには衛兵隊と討伐隊の両方がいる。

他にもいろいろ聞いたけど、ぼくに覚えられたのはこれくらい。

そうこうしているうちに、三日が経った。

第二十話　道中　part　2

ぼくがリュクルゴス隊長・ヴァシリス隊長率いるルイーズ救出隊に加わってから、三日が経った日のこと。ぼくはいつも通り、テントを張る手伝いをしていた。

「ピピ！」

「どうしたのデューク？」

デュークが何かに気がついたように、身を震わせた。

「あっ！」

ぼくの肩に乗っていたデュークが茂みの中に飛んでいってしまった。

――――こういう時ってだいたい良くないことが起こるんだよな……。すでに嫌な予感がしていたが、ぼくは仕方なくデュークを追いかけることにした。

いたいた。

茂みを掻き分けると、思ったより早くデュークを見つけることができた。

しかしてぼくの予感は当たった。茂みの五十メートルほど先に、山のようにこんもりと大きな「何か」がいたのだ。いや実際にはもう少し離れているかもしれないが、とにかくとてつもなく大きいので、距離感がよくわからない。

その大きな山は、猛烈な勢いでこちらに迫ってくる。

ぼくは急いでそこらにいる兵士たちに知らせた。すぐさま戦いの準備を始める兵士たち。

ほどなくして、ソイツはぼくたちの前に姿を現した。

ひと目でわかった。――――牛だ。

とはいえ、自然の牛ではあり得ない大きさであった。闘牛の牛だ

って、コイツに比べたら可愛いもんだ。普通の牛の二、三倍の大きさがあり、それにふさわしい巨大な角まで生えていた。
近くにいた兵士が叫んだ。
「タウロスだ！」
「タウロスって！？」
「牛のモンスターだよ！」
モンスターとは、自然の動植物が月の光を浴びて変化（へんげ）したもの。シーアによれば、モンスターは魔物と違って、自分の縄張りが侵された時だけ襲ってくるらしい。
この一帯は、コイツの縄張りだったらしい。この牛のモンスターは、頭から湯気が出そうなほど怒り狂っていた。
しかしそこは歴戦の戦士たち。こんなモンスターごときにはひるみもせず、猛然と立ち向かっていった。
我々のキャンプに到達することもなく、あっという間に兵士たちに取り囲まれる牛。
いやはや、当たり前だけど、ぼくの出番はなさそうだな。すっかり安心して、ぼくは一足先に料理の支度を始めることにした。

ところで、この世界には当然、マッチやライターなんてものはない。火を着けるのは、いわゆる「火打ち石」みたいなやつだ。
石を金属に打ち付け火花を起こし、それを上手く繊維質の火口（ほぐち）に点火する。後はフーフー。
こんなの歴史の教科書でしか見たことないし、初めは着けられるわけがないと思ったが、実はこれが意外に着けやすい。この国が、乾燥した気候なせいもあるかもね。
三日間練習したお陰で、ぼくはすっかり火打ち石のプロになっていた。

――――帰ったら皆に見せて自慢しよう。記念にひとつ持って帰ってもいいかな……。

くだらないことを考えながら、ぼくはいつもの通りに火を着けた。

「わっ、バカ！」

誰かがひどく慌てた声で、そう叫んだ気がした。

第二十一話　道中　part　3

ぼくが鍋を温めようと火を着けると、突然あたりが騒がしくなった。
なんと、火を見たタウロス（牛のモンスター）が興奮し、暴れだしたのだ。

一気に形成逆転。
タウロスに張り付いていた兵士たちが次々と振り落とされた。
前足を激しく踏み鳴らし、まったく手がつけられない。あわや踏み潰されそうになる兵士たち。
ぼくは慌てて火を消した。しかし、それが一層まずかった。
何を思ったか、タウロスがいきなりこっちに向かって走り出したのだ。キャンプのテントを踏み潰しながら、こちらへ迫ってくる。
蹄の音が、地鳴りのように響いてきた。
しかし、ぼくは迫りくるソイツを呆然と見つめながら、一歩も動くことができなかった。

「ほら、何をぼうっとしてる！　さっさと逃げろ！」
「は、はい！」
気がつくと、リュクルゴス隊長が、タウロスを剣で抑えていた。
他の兵士たちも体勢を立て直し、一斉に飛びかかる。

結局、タウロスはキャンプの周囲をさんざん走りまわった挙句、どこかへ走り去っていった。
もうキャンプはめちゃくちゃ。テントは踏みつぶされるし、馬車は壊れるし。
モンスターが去ったはいいが、ぼくたちはその後、後片付けに追

われることとなった。

「まったく、もう少しで倒せるところだったのに……」

「怪我しちまったよ……」

「隊長はなぜあんな何もわからない子供を連れてきたんだろう」

あちこちで愚痴が聞こえてくる。みんな直接は言わないが、相当、ぼくや、ぼくを雇った（ということになっている）リュクルゴス隊長に頭にきているようだ。

あ〜あ……。

ぼくの馬鹿。グズ。役立たず。

せっかく優しくしてくれたのに、リュクルゴス隊長にまで迷惑かけて。役立たず役立たず……。

「どうしたエンノイア。暗いな」

ぼくが一人、破れたテントを繕っていると、リュクルゴス隊長が声をかけてきた。

「あまり構ってやれなくてすまんな。ちょっといろいろと忙しくてな」

「隊長さんが謝ることなんてありません！」

だいたい忙しいのはぼくのせいだし……。

ぼくが落ち込んでいるのを察してか、リュクルゴス隊長は励ますようにぼくの肩をぽんぽんと叩いた。

「みんなの言うことなら気にすんな。失敗は誰にでもあることさ。次から気をつければいい」

思いがけず優しい言葉をかけられて、涙が出そうになった。

「あの……ぼくはどう言われてもいいんです。ほんとに迷惑かけたから。でも、ぼくのせいで隊長さんまで悪く言われてるみたいで……」

リュクルゴス隊長は笑った。

「なんだ、そんなこと気にしてたのか」

「だって……」
「それはお前のせいじゃない。俺はもともと嫌われ者なんだ」
「そんなこと！」
そんなことあるわけない！　こんな優しい人が嫌われ者だなんて。
そう伝えても、リュクルゴス隊長は意味深に、ちょっと寂しそうに笑っただけだった。

第二十二話　道中　part　4

「ときにエンノイア。お前、剣は使えるか？」

落ち込んでいるぼくを見かねて、励ましてくれたリュクルゴス隊長が、ふいにそんなことを言った。

「つ、使えません……」

リュクルゴス隊長は軽く、そうか、とだけ返した。

ほんとにぼくって役立たずだ……。せっかく励ましてもらったのに、ますます落ち込んでしまった。

すると、リュクルゴス隊長は、思いがけないことを言った。

「覚える気はないか？　よかったら後で教えてやるよ」

「ほんとに！？」

それは願ってもないことだ。ルイーズがあのローブの男・バイバルスに捕らわれてしまったとき、助けに来たのがこのリュクルゴス隊長だったわけだが、そのときの剣さばきがかっこよかったのなんのって！　そんな彼に、剣を教えてもらえるだなんて！

「もちろんお願いします！」

やっぱり、「嫌われている」だなんて、ぼくを励ますための嘘だったんだな。こんなに親切な人が、嫌われ者なわけないもん。

かくして、ぼくはそれから数日間、剣の特訓を受けることとなった。

◇◆◇◆◇◆◇

「ほらほら、踏み込みが甘いぞ！」

ほっ。ほっ。

今、リュクルゴス隊長に剣の特訓を受けている真っ最中。隊長の提案を受けて、ぼくは仕事の合間に、剣を教えてもらえることになったのだ。

それにしても、信じられないな。向こうの世界じゃ、（当り前だけど）剣なんて見たことも触ったこともなかったわけで。それなのにぼくは今こうして、軍隊に混じって、剣をふるっている。

ぼくが通っている学校の誰一人、こんな経験をしたことはないだろう。

「なかなかスジがいいな。もう少し筋肉をつけた方がいいかな？」

汗をぬぐいながら、隊長は笑って言った。

そう。自分で言うのもなんだけど、ぼくって結構剣が上手いと思うんだ。元々運動神経いい方だしね。

ただ、隊長が言う通り、力はあんまり強くないかも。

隊長は剣をしまうと、近くにいた若い男を呼び寄せた。

例のモヒカン頭のヘルメットじゃないから、討伐隊の人だな。隊長はその男を指して言った。

「エンノイア、紹介しよう。討伐隊副隊長、ゾアだ。わからないことはこいつに聞くといい」

まだ二十代前半くらいだろう、あどけなさの残る顔をした彼は、この国では珍しく短髪。いかにも若者らしく、日に焼けて、活き活きとしている。

「じゃ、俺はこのへんで。また後でな」

そう言って、リュクルゴス隊長は仕事に戻っていった。

あとに残された副隊長ことゾアが、よろしく、と手を差し出してくれた。彼と握手をした後、さっそくぼくは気になっていることを聞いてみることにした。あまり立ち入ったことを聞いてはいけないと思い、リュクルゴス隊長には直接聞けなかったことだ。

「すっごく失礼なことかもしれないんですけど」

「なんだい。何でも言ってごらん」
「リュクルゴス隊長とヴァシリス隊長って、仲が悪いんですか？」
あまりに不躾な質問に、ゾアは少々面食らったようだったが、苦笑いをして、答えてくれた。
「ああ……。残念ながら、事実だね」
「どうして仲が悪いんですか？」
「それにはちょっと込み入った事情があるんだ。アイオリア軍には、『討伐隊』と『衛兵隊』があるのは知っているよね？」
ぼくはうなずいた。
「それぞれの隊を束ねるのが、リュクルゴス隊長とヴァシリス隊長なわけだが、さらにその二つの隊を統括する、『将軍』という役職が存在する。現在アレキサンダー様がその職に就いていらっしゃるが、その方が引退なされば、当然次の将軍はどちらかの隊の隊長ということになる」
ここまで聞いて、ぼくはだいたいの予想がついた。だから、次の将軍をめぐって、仲が悪いというのだろう。
「そう。まあ、実のところを言うと、ヴァシリス隊長の方が、一方的にリュクルゴス隊長を目の敵にしているんだが……おっと、これは聞かなかったことにしてくれ」
「それで、結局のところどっちが優勢なんですか？」
「それはまだ何とも言えないな。ヴァシリス隊長の御家は代々、軍の要職を勤めてきた家系で、実力・家柄ともに申し分ない。だが癇癪持ちだし、差別主義だし……人望があるとは言い難いな。対するリュクルゴス隊長は、特に討伐隊からの支持が大きく、王からの信頼も厚い。……厚すぎるというべきかな」
ぼくが首を傾げると、ゾアは声をひそめて、言葉を選びながら言った。
「ほら……わかるだろ。陛下は隊長に対して、つまりその……特別に好意を寄せているから、ヘタに昇格させたりすると、よからぬ噂を立てられかねないんだ。陛下が隊長をひいきしている、とかね。

実際には、陛下は感情で決めたりなさる方じゃないんだが……。だから、誰もが納得できるような大きな手柄がなければ、リュクルゴス隊長が将軍になるのは難しいんだ」
ふうん。わかったような、わからないような。
「それともうひとつ……」
「おおい、ゾア。ちょっと来てくれ！」
ゾアが言葉を続けようとしたとき、リュクルゴス隊長がゾアを呼んだ。
「おっと。おしゃべりが過ぎたようだな。じゃあ、また」
そう言って、ゾアは行ってしまった。
しかし、ぼくはその続きが気になって仕方がなかった。そこで、ぼくはその夜、ゾアのテントに行って、続きを話してもらうことにした。

ぼくは、その夜ゾアのテントへと向かった。副隊長といえど六人で一つのテントを使っているため、ゾアは、テント内の他の人たちがいなくなってから、話を切り出した。

「……これは俺から聞いたって言わないで欲しいんだけど」
話を促すように、ぼくは何度も頷いた。
「リュクルゴス隊長が将軍になるのを難しくしている一番の理由は、彼が異民族だということなんだ」
「異民族？」
あまり耳慣れない言葉に、ぼくは思わず聞き返した。
「そう。彼はアイオリア人ではない。このアイオリア島の西に住む、ウタイ族という部族の出身なんだ」
ぼくははっとした。
そういえば、リュクルゴス隊長の名前はリュクルゴス・ヘイロウタイ。

ヘイロ――ウタイ。

ぼくが変わった名字だというと、周りの兵士たちに笑われたのを思い出した。それから……リュクルゴス隊長の言葉を思い出した。隊長は、自分のことを「嫌われ者だ」と……。

「うん。皆が皆ではないが……ウタイを嫌ったり、バカにしたりする者がいるのは確かだね。それに、十年ほど前までウタイ族とこの国は戦っていたんだ。そのせいで、ウタイを恨んでいる者もいる」

ぼくは悲しくなった。あんなに親切で明るい良い人なのに、出身や立場の違いで、嫌われたり、笑われたりするなんて。

そんなぼくを見て、ゾアは付け加えた。

「とはいえ、彼が傑物であるのは確かさ。そんな不利な立場にありながら、若くして討伐隊長となり、今では多くの兵たちに支持されている。そのことがそれを証明しているよ。俺も隊長のことを尊敬している」

リュクルゴス隊長について話すゾアの口調は、本当に誇らしげだった。

第二十三話　聖地　part　1

学問と宗教の中心地ヒエラポリス。街の中心には、かつてルイーズやバイバルスが在籍していたという大学がある。大学といっても、向こうの世界でいうそれとは幾分異なる。この国でいう大学とは、政治家や士官など、将来国の仕事に携わる人々が、学問・政治・宗教・武術などを総合的に学ぶ場所である。ルイーズ以前の王は、この大学を出ていることを、登用の絶対条件としたという。

学長を勤めるのは、アイオリアで最高位の司祭。

◇◆◇◆◇◆◇

以上、ゾアの受け売り。

ぼくたちは首都アエロポリスを出発してから、約一週間かけて、このヒエラポリスへとやって来た。目的はその学長兼司祭様に、魔界への行き方を聞くため。

こんなに仰々しく出発して来たのに、まだ魔界への行き方もわかってなかったなんて……。なんだか拍子抜け。リュクルゴス隊長によれば、魔界に行くのは、それくらい大変なことらしい。

全員で街に入ることはできないので、リュクルゴス隊長とゾア、数人の兵が司祭に会いに行くこととなった。

ぼくはというと、なんと司祭様がぼくに会いたがっているそうで、一緒に街へ入ることとなった。

街の中に入ると、大小さまざまの神殿が立ち並んでいた。ここは、大学の街でもありながら、宗教の街でもある。歩いているのは神官と、将来を約束された学生たち。陽気な市場の声が響く都と比べると、なんとも厳めしい雰囲気が漂っていた。

リュクルゴス隊長に連れられ、ひときわ大きな神殿に入る。控えていたローブの神官に用件を伝えると、いそいそと奥の部屋に入っていった。
控えの間の壁には、神様と思われる絵がたくさん描かれてあった。神官を待つ間、なんとなくその絵を眺めていると、ふと、その中の一つに目が止まった。

それは、一羽の鳥の絵であった。幾重にも分かれた尾は地に届くほど長く、広げた羽はドラゴンの翼のように、この上もなく優美であった。頭の上にピンと立った羽が、何かを思い起こさせた。
そのとき、ゾアが話しかけてきた。
「アイオロスに興味があるのかい？」
「え……アイオロス？」
「アイオロスはこの国の守護神さ。鳥の姿をした風の神なんだ」
ぼくは自分の肩の上に乗った、デューク――「アイオロス」を見た。
お前ってそんなすごいものだったの！？
しかしゾアは、デュークに全く気を留めていない。デュークがアイオロスだということを、まるで知らないようだ。
「その声を聞くことができるのは王だけ。しかし王でさえその真の姿を知ることはできない。アイオロスは普段、仮の姿をしているからね」
ぼくはどきりとした。またも「王」という言葉。
ぼくはデューク――――イオロスの言葉を聞くことができる。だから「新しい王」って……？

「どうぞ。奥で大司祭様がお待ちです」
しばらくして神官が戻ってきた。

第二十四話　聖地　part　2

ヒエラポリスの司祭に、魔界への行き方を聞きに来たぼくたち。司祭にも魔界への行き方はわからないそうだが、大学の豊富な情報を使って、直ちに調べてもらえることとなった。

それから、大学の学長でもある司祭に、在学中のバイバルスの様子についても聞くことができた。

「……バイバルスは非常に優秀な学生でした。いつも陛下と首位を争っていましたよ」

司祭はそこで顔を曇らせた。

「テラスティアに、大変な憧れを持っていたようです。今考えれば、強大な力を手に入れたがっていたのかもしれません」

その時、外で騒ぎが起こった。先ほどぼくたちを案内した神官が、慌てて部屋に駆け込んできた。

「何事だ？」

「魔物の襲撃です！　街に魔物が二匹現れました！」

一同は色めきたった。司祭はリュクルゴス隊長を見て言った。

「貴方は討伐隊長でしたね。魔物を退治していただけないでしょうか」

「ええ、もちろんです。しかし……」

リュクルゴス隊長は司祭をひとり残してよいものか、悩んでいるようだ。

「私なら大丈夫です。神官もおりますし。どうぞ皆さんで行ってください」

リュクルゴス隊長はしばし考え、部下を引き連れ外へと向かった。ぼくも一緒に戦いたかったので、それに続いた。

な、なんだこりゃ。
外に出ると、確かに魔物らしき生物が、猛威を奮っていた。しかし、その外見はなんとも奇妙。
顔は人間の女のようだが、体は異様に細長く、ウロコがついていて、まるで蛇。しかもその蛇のような胴体からは、六本の人間の腕が生えていて、それぞれが曲がった剣を持っていた。体長は三メートルほど。
そんなやつが、二匹もいる。
「ほらほら、しっかりしろ。稽古の成果見せてくれよ！」
ぼくが圧倒されていると、リュクルゴス隊長がそう言った。
そ、そうだ！　今度こそイイとこ見せなくっちゃ。震える手で貰った剣を握りしめ、ぼくはどうにかこうにか皆について行った。

第二十五話　情けない戦い

人間の女のような頭に、蛇の胴体。その胴体から多種多様な方向に突き出た、六本の腕。

異様な姿をした二匹の魔物は、それぞれの手に持った六本の剣を振り回し、まさに蛇のように体をくねらせながら、聖地と呼ぶにふさわしいこの荘厳な街並みの中を、舐めるように這いずり回っていた。

蠢く胴体が民家や神殿の外壁にぶつかるたび、鈍い衝撃音と共に柱が崩れ、建物の中からは悲痛な叫びが聞こえるのであった。

巣を追われたアリのように、点々と建物を飛び出してくる人間たちに、魔物は容赦なく剣を振るう。

しかし図体の大きな生物というのは、得てして俊敏とは言い難いものだ。振り下ろされた剣の先が虚しく空を切ると、整然と敷き詰められた石畳の地面を割き、その先の土にまで深く突き刺さった。魔物はいかにも腹立たしげに、強引に剣を引き抜くと、次なる獲物を求めて這い回るのであった。

とはいえ人間たちもただ恐れおののき逃げ回っているわけではない。

ここはヒエラポリス。街の中心にそびえる大学には、将来士官になることを志す、武術の心得のある者が多数在籍している。我々討伐隊が到着する以前から、我こそはと思う者たちが、魔物に飛びかかり、剣を突き立て、魔法を浴びせ、それなりのダメージを与えていた。

そんな状況下で駆けつけたぼくたち。街の外で待機していた討伐

隊の仲間や、衛兵隊も合流し始めた。芥子粒のようにちっぽけな人間といえども、これだけ集まればいかなる巨大な魔物でも太刀打ちできないだろう。

ぼくは人の波に揉まれないよう注意しながら、勇気を振り絞り、素早くかつ慎重に標的に接近した。雑踏を掻き分けながら進むと、目の前に魔物の尻尾らしき部分が見えてきた。ウロコの一枚一枚が確認できるほどの距離だ。そのウロコは、ヌメッとしていて、妙な光沢を放っている。

ぼくは剣の柄に手をかけ、そのまま勢いよく剣を抜いた。シーアに貰った短剣とは、長さも重さも段違い。自らの体格に対し大きすぎる剣に戸惑いつつ、全ての刀身を抜き放つと、シャン、と金属のこすれる音がした。

――さあ、いよいよ剣を使う時が来たんだ。

周囲のざわめきが、背景の一コマのように静かになった。まるでこの世界に、ぼくと魔物（こいつ）しか存在しないみたいだ。汗ばむ手で滑りそうになりながら、思い切り剣を振り上げる。

そうして、剣を振り下ろそうとしたその瞬間。

視界がぐるりと回転したかと思うと、みるみる世界が横倒しになっていった。静まり返っていた――ように感じた――雑踏の音が、突然に音量を増した。

目の前を目まぐるしく通り過ぎるのは、人の足？

「大丈夫か！？」

隣で魔物と格闘していた一人の兵士に、腕をグイと引き上げられた。しばらくわけがわからずに、呆然としていたぼくだったが、ようやく理解した。

どうやらぼくがチンタラ剣を構えている間に、魔物が自らの尾を振り回し、ぼくはそれに弾き飛ばされたらしい。そういえば倒れる

直前、一瞬目の前を巨大なウロコのついた胴体が横切ったような。いつの間にやら魔物が体の向きを変えている。

怪我をしたかもしれない！　慌ててシャツをめくると、脇腹に大きなアザができていた。さっきまで痛みなんか感じていなかったくせに、アザに気付いた途端、脇腹がひりひりと痛みだした。

ぼくを助け起こした兵士はこっちを振り向きもせずに、苛立たしげに言った。

「もういいから。下がってろ！」

そ、そんな。ここまできて、そりゃないよ。

戦う意志を見せようと、懲りずに剣を構えようとしたら、手の中に剣がなかった。もちろん腰に差さっているわけでもない。弾き飛ばされた拍子に剣はどこかへフッ飛んでしまったようだ。この雑踏の中で見つけられるとも思えなかったので、ぼくは大人しく引き下がるしかなかった。

あーあ……まーたいいとこなしだな。一朝一夕に剣の達人にはなれないみたいだ。

司祭のいる神殿に戻ってろと言われたので、ぼくは雑踏を掻き分けつつ、元来た道をのろのろと引き返さなければならなかった。

第二十六話　不穏な気配

ぼくは再び司祭のいる神殿に向かって歩いていた。

周囲の建物の破損具合が、魔物の力の凄まじさを物語っている。柱がなぎ倒され、屋根の落ちた神殿。壁が破壊され、居間がむき出しになってしまった民家。

建物の中にいた人々はどこへ行ったのだろう。上手く逃げ延びたのかもしれないし、打ち砕かれた壁や柱の餌食になったのかもしれなかった。

死体を見ることはなかったが、魔物と格闘する兵士に紛れて、怪我人を担架で運ぶ兵士の姿があった。

――――大きな街は幸いだ。あのワイバーンに襲われた村は、このような手厚い保護を受けることができなかったのだから。

目の前に広がる悲惨な光景と、人々の異様な熱気に眩暈がした。早く神殿に戻りたかった。脇腹が痛むせいかもしれない。さっきまでの意気込みが嘘のように、ぼくの気は縮んでしまったのだ。

魔物は街の入り口から大通りに沿って、街の中心部あたりにまで達していた。大通り付近の建物は無残に破壊されていたが、幸い司祭のいる神殿は街の中でも最深部の、小高い丘の上に位置している。空を飛ぶ魔物でなければ、あの雑踏を飛び越えて襲うということはないだろう。

やや丘を登ったところで、下の街から歓声が響いた。

この丘から魔物のいる地点までは五百メートルほど離れているが、この街の建物は高くてもせいぜい三階建て、しかも魔物の襲撃によ

り一部は破壊されていたので、建物が視界を遮ることはない。さらに高低差のせいもあり、街の中心部をよく見渡すことができた。
見れば、ちょうど魔物の一体が倒されたところであった。
蛇のような胴体をした魔物は、その長い体を石畳の地面にぐったりと横たわらせていた。体をS字状にくねらせながら、しばらく痙攣していたかと思うと、次第にその動きは弱まっていった。
そうしてぴくりとも動かなくなった時、横たわった魔物の胴体に、一人の人間が勝ち誇ったようによじ上った。それを皮切りに次々と人々が上り始め、口々に雄叫びを上げる。
その叫びは、丘の上にまで響いてきた。人間の勝利にホッとする反面、自分があの場にいないことが少し悔やまれる。とはいえ、今さら戻ろうという気にはなれなかった。
残るはもう一体。もう一体の魔物は倒された魔物と全く同じような外見をしていたが、この丘からはより離れた、つまり街の入り口側の方にいた。しかしその一体もすでに六本の腕が切り落とされ、倒されるのは時間の問題と思われた。安心して、ぼくは司祭のいる神殿を目指す。

魔物に弾き飛ばされた拍子に打った脇腹が、まだヒリヒリと痛む。傾斜のある道を歩く時はなおさらだった。どうせ誰も見ていないのだし、ぼくは脇腹をかばいながら、ヒョコヒョコと妙な歩き方で坂を登っていった。
しばらく行くと、神殿の三角屋根が見えてきた。白大理石でできた柱の一本一本が、春の日差しを受けて輝いている。ここだけ見れば、まさに平和そのものだった。
重厚な装飾のついた扉を開け神殿に入ると、中は妙にひっそりとしていた。人の気配はおろか、話声ひとつしない。いや、神殿なので静かなのは当たり前なのだが、神官の一人も見当たらないというのは、どうにもおかしい。
控えの間に行くと、ようやく神官らしき男を見つけることができ

た。フードを目深に被っているので顔は見えないが、ローブに描かれた特殊な文様を見るに、先ほどぼくらを案内した神官だろう。彼はぼくに気がつかないまま、奥の部屋へと消えていった。奥は司祭のいる部屋だ。

その時、ぼくはひどく違和感を覚えた。

彼の歩き方はどこか変だったのだ。ぼくがさっきやっていたように、腹部を押さえながら、妙な足取りで歩いていった。そう、まるで、腹に怪我でもしているかのように。始めぼくたちを司祭の部屋へ案内した時、神官はそのような歩き方をしていただろうか？

目深に被ったフードに、腹部の怪我……。ぼくは嫌な予感がした。

第二十七話　失われた希望

――どうか思い過ごしであってほしい。
そう願いつつ、ぼくは疑惑の神官が消えた方向へと急いだ。
もしもあのローブの男がバイバルスだとしたら、一刻の猶予もない。ぼくはノックをする間もなく、神殿の中でも一際立派な扉を乱暴に開け、中に飛び込んだ。

一瞬、中には誰もいないのかと思った。
確かに、ぼくの目の高さに人はいなかった。円形の石造りの部屋には、壁に沿ってところ狭しと本棚が並べられていて、部屋の中央には、分厚い本が乱雑に積まれた豪華な机が置かれていた。机の縁には金があしらわれ、眩しいほどに光っている。優美な曲線を描いた机の脚。そのラインを辿り、徐々に目線を下げると、ぼくの視界に恐ろしい光景が映った。

机の前に大きく横たわった物体。それは、血を流して倒れる司祭の姿だった。
緋色のローブの胸のあたりに、明らかに布地の赤とは異なるドス黒い液体が染み出していた。
「あ……あ」
声にならない。足の力が急速に失われて、無意識のうちに尻もちをついた。歯の根がかみ合わずガチガチと音を立てている。次第に目の前が霞み始め、ぼくの意識は遠のこうとしていた。
しかしその時、視界の隅に僅かに動く司祭の口元を見つけて、ぼくは気を取り戻した。まだ息がある！
「司祭様！」
ぼくは震える足でよろけながら必死に立ち上がり、慌てて司祭に駆け寄った。仰向けに横たわった司祭の背に手を差し込み、抱きか

かえようとするが、支える力を失ったその体をぼく一人の力で持ち上げることは不可能だった。
引き抜いた手に赤黒い液体がべったりと貼りつく。よく見れば、血で汚れたローブの胸元には、鋭利な刃物で差し抜かれたような跡があった。
司祭を貫いた凶器はおそらく胸から背にまで達したのだろう。背から溢れ出た血は白いタイル張りの床を真っ赤に染めていた。
全ての血液が流れ出てしまったかのように、蒼白な顔面。虚ろなその瞳はかろうじて開かれてはいるが、ぼくを見ているのか、いないのか。
ぼくは彼に一刻も早く手当てを受けさせてあげたかった。しかし、助けを呼びに行っていては間に合わない。その時、部屋のバルコニーに目が止まった。王宮にあったものと同じような窓のないバルコニーである。
バルコニーから叫べば外の人に気づいてもらえるかもしれない。
そう思って立ち上がろうとした時、思いがけず強い力に引き戻された。

なんと司祭が、弱々しく投げ出されていたその手でぼくの上着の裾をしっかりと掴んでいたのである。
彼の顔を見ると、目は光を取り戻しカッと見開かれていた。そして、口を何らかの発音の形に動かしているのが見て取れた。その口元は確かに何かを語ろうとしているのだ。
しかし、ヒューヒューと息が漏れるばかりで、声になっていない。
「司祭様！　司祭様！　しっかりして下さい！　何を仰ろうとしているんですか！？」
口に耳をつけるようにして、必死に司祭の言わんとする言葉を掴もうとする。すると、その口元からかすかに声が漏れ始めた。
「魔界……かた……かりました」
「魔界！？　魔界への行き方がわかったんですか！？」

ぼくの問いかけには答えず、司祭はなおも声を絞り出す。
「プネ……マ……に……ぎょ、く……を」
司祭の声はかすれていて、上手く聞き取れない。
『プネ……マ』とはプネウマの鏡のことだろうか？　『ぎょく』とは何だろう？
司祭は辛そうに肩で息をする。せっかく光を取り戻した瞳が、今にも閉じられようとしていた。それに、急に力んだせいだろう。胸元のドス黒いシミの上に、新たに真っ赤な血が吹き出てきた。
もう見ていられなかった。やはり手当てを。バルコニーに向けて駆け出そうとするが、またも強い力に引き戻される。この状態で、どこからそんなに強い力が生み出されるのだろう。その瞳から光が失われつつあっても、ぼくを掴んだ手だけは絶対に放そうとはしない。

ぼくは悟った。彼は自らの死を覚悟しているのだろう。その前にどうしても彼の責任を果たしたいのだ。
必死に司祭の肩をゆすり、彼の目が閉じられるのを阻止する。
「お願いします！　もう少しだけ頑張って下さい！　『ぎょく』とは何ですか！？」
ぼくの言葉が届いたのか、彼は再び目を見開いた。
「ほ……ぎょく……」
「ほ……ぎょく？　宝玉！？」
司祭は頷く代わりに大きく息を吸った。そして、今までで一番力強い声で言った。
「魔界の封印……解ける」

――プネウマの鏡に宝玉を。魔界の封印が解ける。
これが司祭の伝えたかったことだろうか。これが、魔界への行き方だと。

「そうですね！？　司祭様！」
もはや返事はなかった。そこまで言い終えた司祭は安心したように、静かに目を閉じた。
ぼくは司祭の体にすがりつき、必死に呼びかけ続けた。
しかし何度呼びかけても、どんなにゆすっても、閉じられた目が再び開かれることはなかった。

第二十八話　テラスティアの宝玉

司祭が――亡くなってしまった。
ぼくは司祭の体にすがりついたまま、少しも動くことができなかった。冷たくなっていく彼の体よりも早く、自分の体温が失われていく気がする。
外の人に知らせたり、司祭の残した言葉について考えたり。すべきことはたくさんあったはずだが、今のぼくには何も考えられなかった。
涙は出ない。しかし指先の震えがずっと止まらなかった。悲しいのか、怖いのか、あるいは悔しいのか。自分でもわからなかった。

やがて、扉の向こうから複数の人の話し声と足音が聞こえた。リュクルゴス隊長たちが魔物を倒し終えて戻ってきたのだろう。声を聞いているだけで、興奮し顔を紅潮させた兵士たちの様子が容易に浮かぶ。
しかし今のぼくにとって、浮かれた人々の会話など耳障りな音でしかなかった。
立ち上がらなければと思うが、体に力が入らない。
そのうちに、扉の向こうの足音が激しさを増した。声も先ほどのような浮かれたものではなく、不安に満ちたざわめきへと変わった。
やがて開け放したままの部屋の入り口に複数の人の気配を感じた。
おそるおそる顔を上げると、やはりリュクルゴス隊長率いる討伐隊数名だった。彼らは司祭の亡骸にしがみついたぼくを見て始めなにがなんだかわからなかったようだが、その中の一人が思わぬことを口にした。
「お、お前！　よくも司祭様を！」

ぼくの思考は完全に停止していたにも関わらず、その兵士の言わんとすることを理解するのに長くはかからなかった。あまりの想定外の事態に、ぼくは驚愕して目を見開いた。

「ち、ちが……ぼくがやったんじゃ……」

何か言わなければいけないと思うのに、頭が混乱して言葉が出てこない。

「司祭様から離れろ！」

本能的な力が働き、ぼくは慌てて司祭の体から飛びのいた。

ずっとしがみついていたせいで、ぼくのシャツは血で真っ赤に染まっていた。シャツの下の肌に、貼りつくようにじっとりと嫌な感触が伝わった。

部屋にたった一人で、司祭の亡骸を目の前にして、シャツを血で染めた人間の話など誰が信じるだろう。

誤った方向に状況を理解した他の兵士たちもヒステリックに騒ぎ立て始めた。

まさかこんなことになるなんて！　冷や汗が顔をつたい、目の前が真っ暗になった。

「いいや、違うと思うぞ」

騒然となった室内に、リュクルゴス隊長の低い声が響いた。さほど大きな声ではないのに、その貫禄のせいか、一気に部屋が静まり返る。

彼は無言のままつかつかと司祭の体に歩み寄ると、目線で床を示した。

相変わらず白タイルの床には真っ赤なシミが広がっている。リュクルゴス隊長はそのまま目線を移動させた。

その視線の先を追うと、部屋を横切るように、司祭の体の下に広がるシミから点々と赤い液体が続いていることに気付いた。

そしてその行きつく先は……壁であった。

いかにもひんやりと冷たそうな、石造りの壁。周囲の壁には隙間

なく本棚が並べられていたが、意識して見れば不自然なほどその壁の部分だけぽっかりと開いていた。
血はそこで途切れている。
リュクルゴス隊長は血の跡をたどるように歩き、不審な壁に近づいた。そしてその壁を押した。
ぼくは息を呑んだ。石と石のこすれる音がしたかと思うと、壁の一角、扉一枚分ほどの大きさの区画が、まさに扉のように奥に向かって開いたのだ。――いわゆる隠し扉というやつだ。
ぼくもその壁に近づき、扉の向こうを覗き込んだ。ひんやりとした空気が流れてくる。
暗くてよく見えないが、下向きの階段が続いているようだ。そしてその階段にもやはり赤い液体が点々と垂れていた。
リュクルゴス隊長はすぐに数名の兵士を調査に向かわせた。

「向こう側に取っ手はない。こちら側からしか開けられないようだな」
向こう側から開けるときは扉を引かなければならないのだから、取っ手がなければ開けることができない。リュクルゴス隊長が扉の反対側をさわり、取っ手がないことを示す。
まだ手の震えはおさまらなかったが、疑いが晴れたことでぼくの頭は落ち着きを取り戻し、ようやく伝えるべきことを思い出した。
「怪しい神官が部屋に入るのを見ました。でもぼくがこの部屋に入ったとき、すでにそいつはいなくなっていたんです」
ぼくは神殿に戻ってきた経緯、神殿に入った時の違和感、神官の妙な歩き方について話した。
「そうか……神官か……」
リュクルゴス隊長は目を閉じ、ぼくの話を苦渋に満ちた表情で聞いていた。それもそのはず、ぼくたちはまたしてもバイバルスにしてやられたのだ。
それも、まだ助かるかもしれないルイーズと違い、司祭の命は無

残に奪われてしまった……。

なぜバイバルスは司祭を狙ったのだろう？　それを考えるうちに、ぼくは大事なことを思い出した。

「司祭様が亡くなる直前に、魔界への行き方を伝えてくれました」

――プネウマの鏡に宝玉を。魔界の封印が解ける。

リュクルゴス隊長は宝玉という言葉を聞き、はっとした表情になった。

「この言葉の意味がわかるんですか？」

「ああ。この国で『宝玉』といえば、テラスティアの宝玉しかあるまい」

この世界に来てから、『テラスティア』という言葉を何度か耳にしている。

テラスティアというのは、いつかシーアが話していた、かつてこの国を含め広大な土地を支配していた国だ。

リュクルゴス隊長によれば、テラスティア時代につくられた五つの宝玉というものがあるらしく、その宝玉をプネウマの鏡にかざすことによって魔界への扉が開かれるのでは、ということだった。

宝玉はテラスティア時代の神殿の遺跡に厳重に祀られているらしい。

リュクルゴス隊長は『厳重に』という部分を特に強調して言った。神殿の場所こそわかってはいるが、その入り口は固く閉ざされ、今まで開かれたためしがないという。

要するにテラスティアの神殿の遺跡の中に宝玉がある、というのは伝説のようなもので、実際にそれを目にした者はいないのだ。

しかもテラスティアは現在の三か国にまたがる巨大な国であったので、その神殿もまた三か国のあちこちに点在している、と。

このアイオリアに二つ、東のアディスという国に一つ、北のチュートニアという国に二つ。

それを集めるのに、どれくらいの時間がかかるのだろう。そして、

いつになったらぼくは元の世界に帰ることができるのだろう。
ぼくは、愕然とした。

第二十九話　疑惑

リュクルゴス隊長の調査によって、司祭の部屋の隠し扉の先は街の外につながっていることが判明した。
後からわかったことだが、この神殿にはもともと有事に備えて直接街の外へと出られる隠し通路がつくられていたらしい。
それから神殿の一室に、神官全員が眠らされた状態で見つかった。そして思ったとおり、その内の一人は衣服を脱がされていた。

つまりこういうことだ。
司祭がすでに魔界への行き方を見つけたことを知っていたのかはわからないが、とにかくバイバルスは魔界への行き方がぼくたちに伝わるのを防ごうと思ったのだろう。
この街に魔物を呼び寄せ、ぼくたちの注意を引いている間に神官たちを眠らせ、そのうちの一人の衣服を剥ぎ取り、神官に変装して怪しまれずに司祭を殺そうとした。
計画は、一応成功した。バイバルスは司祭を殺した後、例の隠し扉から街の外に出た。
しかしぼくがバイバルスの予想よりも早く戻ってきたため、あるいは司祭の生命力が強かったため、真の目的は阻止することができた。

とはいえ、手放しで喜べるはずもなかった。
司祭の死を目の当たりにしたぼくはもちろん、リュクルゴス隊長含めぼくの周りにいる兵士たちみな、悲痛な面持ちで魂が抜けたようにぼんやりとしていた。
バイバルスの計画を阻止できたかどうか、そんなことはたいした問題じゃない。
司祭の死はみんなの心に深い影を落とした。彼はこの国の人々に

とってそれほど大事な存在だったのだ。ぼくはそのことを思い知らされた。
そんな抜け殻のような集団は今、都アエロポリスに向けて歩いている。
なぜアエロポリスに戻るのだろう？　宝玉を集めに行くんじゃないのかな？
ぼくは不思議に思ったが、その疑問に答えてくれる人は一人もいなかった。

「悪いなエンノイア、変なことに巻き込んで。怪我をしたそうじゃないか。あまり無理をするなよ」
いつものように優しい言葉をかけてくれたのはリュクルゴス隊長だった。ぼくは目いっぱい首を横に振った。
そういう彼のほうが、青ざめた顔をして、明らかに無理をしていたからだ。
「無理なんかしてません。怪我っていってもただのアザだし。隊長さんこそ無理してるんじゃないですか？」
「あ……そうだな。正直言うと、ちょっときついんだ。いろいろとな……」
普段他人に心配されたりすることがないのだろう。彼は少し面食らったような顔をして、それから気弱そうに笑った。

――都に戻る理由を知っている人がいるとすれば、それはリュクルゴス隊長とヴァシリス隊長だ。

司祭の遺体を処理した後、ぼくたちは数日間街の外のキャンプで待機していた。
その間に伝書鳩で今回の件のことを都に報告したようなのだが、都からの返事をたずさえて鳩が戻ったとき、ぼくはたまたま目撃してしまった。

頭を抱え込み地面にがっくりと膝をつくリュクルゴス隊長の姿を。あのヴァシリス隊長が、悔しそうに涙を流す姿を。

しかし彼らはその後理由を告げないまま、都に戻ることだけをみんなに伝えた。

兵士たちはみな気力が殺がれていたから、誰もそのことに触れようとはしなかった。

あの絶望する様子を見ていたらとても本人たちに聞く気にはなれなかったし、副隊長のゾアでさえもその理由は知らないようだった。

そういうわけで、ぼくたちは今のろのろと都へ引き返しているのだ。

都の方角に不吉な暗雲が立ち込めているように見えるのは、この国には珍しい曇り空のせいばかりではないだろう。

第三十話　運命

都への帰りの様子は、まさに通夜のようだった。
行きで遭遇したあの牛のモンスターにも会ったし、帰りに何事もなかったわけではないが、正直あまり思い出したくはない。
誰も余計なことをしゃべらないし、笑わない。重苦しい空気に息が詰まりそうだった。

そしてぼくたちは今日、ようやく都アエロポリスへとたどり着いた。
都の人々にどこまでの情報が伝わっているのかは知らない。だが王を失って、心なしか皆不安そうな表情を浮かべているように見えた。
ぼくたちは街の人々に見守られながら、賑わう市場を横目に、王宮へと向かう。
最初に来たときは王に会いに来る人々で賑わっていた王宮も、ルイーズがいなくなってしまった今はひっそりとしている。王宮にいるのは見張りに残された数名の兵士たちと、王宮に勤めているらしい人たちだけだ。ルイーズの従兄弟だという代わりの人物が立っているかとも思ったが、それはなかったようだ。

しばしの休憩時間の後、兵士たちは討伐隊、衛兵隊に分かれて、それぞれ王宮の一室に集められた。
――いよいよ、都へ戻った理由が語られるようだ。
ぼくも討伐隊の方で話を聞かせてもらえることになった。入り口の大広間よりは狭いが、それでも三百人ほど収容できそうな大きな部屋。そこにちょうどそのくらいの数の討伐隊の面々が、整然と並んでいた。邪魔にならないよう部屋の隅の方に立ち、語られる時を待つ。

兵士たちはさすがに疲労の色が隠せないようだったが、それ以上に緊張しているのがわかる。ぼくだってそうだ。
やがて整列した兵士たちの前に、リュクルゴス隊長が現れた。彼はいっそう青ざめた顔をして、倒れるのではないかと心配になるほどだった。隣には副隊長のゾアが控えている。手に何か持っているようだが、上に布が掛けられていて見えなくなっていた。

まずは兵士たちに簡単なねぎらいの言葉がかけられる。
しかし彼らが聞きたいのはそんな言葉ではない。それは隊長もよくわかっているだろう。早く事情を説明してほしい――急かすように、部屋中に異様な緊張感が漂った。
そして、彼はおもむろに口を開いた。
「なぜ都へ戻ってきたのか、皆も気になっていることだろう」
その通りだ、というように皆が無言でうなずいた。
「実は先日都から通達があったのだ。我々は議会の決定により……」
ゴクリ。ぼくは生唾を飲み込んだ。

「陛下の救出を中止する」

誰もが、その言葉を理解するのに時間を要した。部屋は奇妙な静けさに包まれた。
そして静寂は突然破られる。
「なぜですかっ！？」
「そうだそうだ！」
「ここまできてどうして……！」
一人の兵士が発言したのを皮切りに、皆がワーワーと騒ぎ立て始め、質問の嵐となった。
ぼくは何を言っていいのかもわからず、違う世界の出来事のようにただその様子を眺めていた。
「まあ待て、落ち着け。これを見てもらえばわかる」

リュクルゴス隊長が手で皆を制し、ゾアに合図を送った。
ゾアは手に持っていた何かに掛けられた布を取り去った。
布の下にあったものは――水晶球だった。
ちょうど片手に乗るくらいの大きさで、あやしげな光を放っている。
不思議なことに、中には何の仕掛けもないように思われるのに、その水晶球は中心から自発的に発光しているように見えた。それも、脈打つように光が揺らめいている。
ぼくはそのことに驚いて、兵士たちの顔を見た。
しかしぼくの予想に反して、彼らの表情は水晶球が光っていることに対しての驚きではなく、絶望の色を浮かべていた。
もう、誰も何も言わない。ある者は溜め息をつき、ある者は頭をうなだれていたが、皆総じて事態を把握したようだった。
リュクルゴス隊長は彼らが事情を理解したことを確認するようにうなずくと、口を開いた。
「俺たちがヒエラポリスに着いた頃、執政官閣下が大神殿でこれを見つけられたそうだ。これでわかっただろう？　……つまりはそういうことだ」
皆はそれを聞いてあからさまに落胆していたが、ぼくだけが全く要領を得ない。サッパリ意味がわからない。
「あの……」
ぼくは場の空気を乱すことを承知で、思い切って声を出した。シンとしているので、さほど大きな声でなくとも端から端までよく通る。
そこにいた全員が一斉にぼくのほうを振り返った。
大勢に注目され、たじろぎながらも、ぼくは必死に言葉をつないだ。
「わかりません。どういうことですか？」
こんな状況だからか、誰も笑ったりはしない。リュクルゴス隊長

はぼくと目が合い、少しだけその表情を和らげた。
「お前もこの国の王が他の国のような世襲ではなく、アイオロスによって選ばれることは知っているだろう？」
そんなの知らない。ぼくは首を横に振ったが、隊長は構わず先を続けた。
「この水晶球はアイオロスの心臓と呼ばれる神器だ。王に、次に王となるべき人物の姿を知らしめる役割がある。しかし普段は光を失っていて、王の死期が迫ったときのみその力を発揮する。王は最期の仕事として、自分の王位を継ぐ者を見つけねばならぬということだ」
死期、という言葉に鳥肌が立った。だんだんわかってきた気がする。
続きを聞くのが怖かった。
「今この水晶球は光っているだろう。王でなければ次なる王の姿を映し出すことはできないが、この水晶球が『活動』していることは間違いない。つまり……」
足が震えてきた。ぼくは必死に首を振った。もういい。もうわかったから。
そんなぼくの思いとは裏腹に、リュクルゴス隊長は――おそらく意図的に――淡々と説明を続けた。
「陛下の死期が近いということだ。近いといってもときには一か月後だったり、ときには一年後だったりするが、この水晶球が王の死期を間違うことは絶対にない。今現在陛下が存命にせよ、どうせ死期が近いのなら救出しても無駄……それが議会の出した結論だ」
ルイーズが……死、ぬ？
あの水色の髪をした女性（ひと）。ぼくが今まで出会った中で一番きれいな女性。
あの柔らかい手。優雅な微笑み。まだ会って間もないけれど、ぼ

くは確実に彼女に魅了されていた。
その彼女が……死ぬ。全く実感が湧かなかった。
そしてなにより彼女が亡くなれば、ぼくは永遠に元の世界に帰る術を失うことになる。

永遠に……？
ここでぼくは一つの大きな疑問に行き当たった。王にしか次の王の姿を映し出すことができないというのなら、むしろ全力でルイーズを救出すべきではないのだろうか？　そうでなければ、この国は永遠に新しい王を見つけられないことになる。

「いいところに気がついたな。その通りだ。しかし、王というのは、アイオロスの声を聞くことができるそうじゃないか。新しい王もまた然りだ。おそらくその者が自ら名乗り出るだろう、というのが議会の見解だ」
リュクルゴス隊長はなぜか「議会の決定だ、議会の見解だ」という言葉を何度も繰り返す。自分は納得していない、ということだろうか。
しかし、そうか。王というのは、アイオロスの言葉を聞くことができる。確かにそんなことを、どこかで聞いた気がする。ルイーズが探さなくとも、いずれはその者が名乗り出るだろう、と。それは一応的を射ているように思われる。

そしてぼくはあることに気がついた。いいや、本当はずっと前から気づいていたのかもしれない。だけど、考えたくなかった。それはぼくの人生を完全にひっくり返してしまうほどの、恐ろしい事実だから。
なぜぼくがこの世界に呼ばれたのか――全ての答えがここにある。
そう、その「新しい王」こそが、ぼくなのだ……。

第三十一話　リュクルゴスの決意

「あ、の……」
ぼくが、新しい王。
そう言わなければならないと思うのに、言葉が出ない。
リュクルゴス隊長が顔をこちらに向けて、ぼくの言葉を待ってくれている。
「あの……ぼ、ぼ、ぼくは……」
ここで名乗り出たら、ぼくの人生はどうなってしまうんだろう。それこそもう二度と元の世界に帰ることができないかもしれない。
部屋にいる全員がぼくのほうを見ている。額から汗が噴き出してきた。足がぶるぶると震えだした。
皆は焦るぼくの様子を見て不思議に思ったことだろう。いや、あるいはルイーズが死ぬことに対して動揺しているだけだと思ったかもしれない。
言わなきゃ。ぼくはアイオロスの声を聞くことができる者です、ぼくが選ばれた王です、って。
「ぼくは……ぼくは……」
永遠とも思えるほどの長い沈黙ののち、ぼくはついに――

「……王様の救出を諦めたくないです」
――名乗り出なかった。ぼくが発した言葉は、ただそれだけ。
ぼくの言葉を受けて、兵士たちは口々に「そうだ、そうだ！」と叫びだした。
これでいいんだ。この世界の住人でないぼくが、王だなんて。そうだ、きっと何かの間違いだ。デュークが「アイオロス」かもしれない、ってことだって、ぼくの勘違いかもしれないじゃないか。
ルイーズが自分のペットに、神様にあやかってアイオロスという名前をつけた。ただそれだけのことだ。

魔物やモンスターがいるような世界だ。ちょっとくらい意思疎通ができる鳥がいたって、不思議じゃない。
ぼくは肩の上にとまったデュークを見た。彼はずっと置物のように押し黙ったままで、その目からは表情を読み取ることはできない。
きっといつか本当の王が現れることだろう。ちゃんとこの世界の住人で、大人の。
そのころには、ぼくは元の世界に帰っているはずだ。まだ解決の糸口は見えないけれど、きっと母さんと仲直りして、元通りに暮らすんだ。

……本当にぼくはそう信じているのか？　いいや、おそらく違う。
しかしそう思わなければ、ぼくは心を保てそうになかった。

ぼくの発言によって、皆はすっかりルイーズを助けるムードになっていた。
今すぐにでも部屋を飛び出しそうだ。
「ああ。もちろん陛下を見捨てたりはしない」
リュクルゴス隊長も、本当は初めから心を決めていたのかもしれない。納得するように、大きくうなずいた。
しかし、それは予想外の方向の決断だったようだ。兵士たちの興奮が最高潮に達していたとき、彼はとんでもないことを言い出した。
「お前たちはここに残ってくれ。救出には、俺一人で行く」
ぼくは耳を疑った。一人でだって？　そんなばかな！
またしても部屋中が混乱に包まれた。ゾアが皆を制するが、今度ばかりは収まりそうにない。
隊長は声を張り上げた。
「落ち着いてくれ！　考えてもみてほしい。救出中止の命令を出したのは、執政官閣下だ。国王代理という形だが、陛下が王宮にいらっしゃらない今はこの国の最高権力者と言っても過言ではない。議会も満場一致で救出中止の結論を出した。そんな彼らの命令に、討

伐隊全員で逆らうのか？　……それは、もはや謀反だ」
謀反、という言葉に兵士たちは冷や水を浴びせられたように静まり返った。
「ですが、隊長は？　討伐隊長が命令に逆らうのも同じでは？」
兵士の中の一人が聞いた。
「俺は討伐隊長をやめる」
リュクルゴス隊長は皆がざわつき始める前に、急いで弁明した。
「もちろん陛下が戻られるまで、だ」
戻らなかったら？　なんて、誰も聞くことができない。彼の頭にその選択肢はないだろう。
それから彼は深呼吸して、言い聞かせるように、一言一言を強調して言った。
「俺は、アイオリアの一市民として、個人の意思で、個人の責任で、個人の力で、陛下を助けに行く。討伐隊も、国も、一切関係ない！」
もう誰も彼を止めることはできなかった。
その言葉を最後に、集会は終わった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9070v/

aiolos

2012年1月14日06時54分発行